明治卅六年四月五日第三種郵便物認可　毎月一回一日發行

家庭雜誌

第四卷

第一號

明治三十九年一月一日發行

由分社

東京市麴町區元園町壹丁目廿七番地

印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店

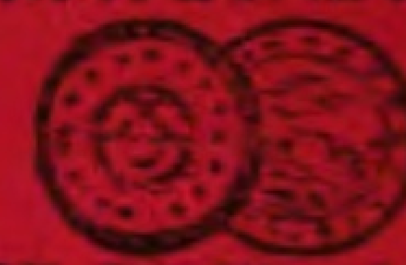
第五回内國勸業博覧會銅牌及褒賞狀受領

●壽美禮おしろい●

壽美禮おしろい　ねり製定價（大壜二十錢 小壜十二錢）　水製定價（大壜二十五錢 中壜十五錢 小壜十錢）

登録商標 壽美禮おしろい

五二會品評會功勞銅牌



THE BEST MADE
SUMIRE
VIO ET PASIE



すみれ白粉は
菫おしろいは
壽美禮白粉は

歐米諸國に専ら流行する香料及弊店特製の化學的炭水素の新成蹟體等を以て調製しあるを以て總てを艶麗ならしめ芳香馥郁として長時間保續するの特性あり芳香馥郁と長く保つが故宴會祝席雑踏の場所に衛生上良好の逸品なり高等優美にして意匠も美妙なれば御進物に最も適當す方今東京横濱に於て上流社會に益々好評を博しつゝ流行せり

錫栓附乳白硝子壜入



ヴワイオレツト水製

●皮膚艶白劑●壽美禮あらい粉●

綠、藍、紅彩蝶番ひボックス入 三錢
鑵詰 六錢五厘　袋入 壹錢

●弊舖製造の壽美禮洗粉の義は方今歐米諸國に専ら賞賛する香料及弊店新製の原料を用ひて製せしものなれは朝夕此洗粉を御用ひ給へば能くあかを落し御肌を美しくなす

◎常に髪洗ひに用ひ給へば髪のねばりを取り油あか等を生せず又半襟ハンカチーフ絹綿等に用ひて能く汚垢を落す總て物を染白する性あり

◎使用法は普通あらひ粉の半分にて能し水又は温湯に溶し又はぬかに混せ入浴の際用ふるを良とす

登録商標

SUMIRE.
Washnlg Powder

壽美禮あらい粉



製造本舖　東京東兩國（兩國橋際）元町

伊勢吉壽美禮堂謹製

販賣所は全國到る處小間物店化粧品店賣藥店其他各勸工場各劇場運動場に有り

「松本樂器目錄」御入用の御方は郵券貳錢御送付あれ

風琴 洋琴

月賦販賣 賃貸交換 修繕調律

(定價表)

ピアノ			円
壹號		A	280.00
仝		B	300.00
仝		C	330.00
貳號		A	300.00
仝		B	350.00
參號		A	350.00
仝		B	380.00
四號		A	400.00
仝		B	450.00
五號		A	500.00
仝		B	550.00

オルガン		円
デスク形	第壹號	20.00
仝	第貳號	30.00
仝	第參號	33.00
仝	第四號	45.00
仝	第五號	45.00
仝	第六號	53.00
仝	第七號	63.00
仝	第八號	75.00
仝	第九號	85.00
仝	第拾號	100.00
普通形	第壹號	17.00
仝	第貳號	27.00
仝	第參號	37.00
仝	第四號	46.00
仝	第五號	48.00
仝	第六號	56.00
メーイン形	第七號	66.00
仝	第八號	77.00
仝	第九號	90.00
仝	第拾號	100.00
仝	第拾壹號	120.00
クラウン形	第拾貳號	150.00
仝	第拾參號	180.00
仝	第拾四號	200.00



松本樂器合資會社

製造所 東京市京橋區新湊町五ノ一

販賣店 東京銀座四丁目四番地

電話新橋 二九八番

早稻田文學

第[illegible]號要目（[illegible]發兌）

囚はれたる文藝	島村抱月
文ひろげの狂女	幸堂得知
劇樂の表情法に就きて	田中博士
巨人	中村春雨
川柳史料	岡田博士
魂の常井	薄田泣菫
同作曲	東儀鐵笛
心中涙の玉の井	水谷不倒
乞食	小川未明
石佛	繁野天來
近松の出世景清	饗庭篁村
余が犯せる殺人罪	德富蘆花
此の眞理を宣す	綱島梁川
百合若傳說の本源	坪内逍遙
彙報（卅一年以後を評論せる）	文藝協會會員募集 小說募集廣告其他

定價 一冊金貳拾錢郵稅一錢五厘一年分十二冊前金郵稅共金貳圓四十錢

病間錄	（梁川）		小包料拾錢
通俗 新約物語	（中村春雨）	金壹圓	小包料拾錢
兒童の研究	（五十嵐力）	金壹圓	小包料拾錢
妙な男 前後二冊	（菊池幽芳）	各六十錢	郵稅各六錢
密航婦	（中村春雨）	金七十錢	郵稅八錢
縁の糸	（柳川春葉）	金六十錢	郵稅八錢
間一髮	（須藤南翠）	金七十錢	郵稅八錢
琵琶歌	（大倉桃郎）	金六十錢	郵稅八錢
露の曲	（佐野天聲）	金六十錢	郵稅八錢
喜劇 七草	（巖谷小波）	金七十錢	郵稅八錢
白玉姬	（薄田泣菫）	金八十錢	郵稅八錢
塔影	（河井醉茗）	金四拾五錢	郵稅四錢
冥想詩劇 海堡技師	（岩野泡鳴）	金四十錢	郵稅四錢
戀衣	（晶子其他）	金四十錢	郵稅四錢
小扇	（晶子女史）	金卅五錢	郵稅四錢
俳人芭蕉 自筆木版	（正岡子規）	金七十五錢	郵稅不要
白馬會畫集	（卅八年度）	金九十錢	郵稅不要

發兌元 東京市京橋區五郎兵衛町廿貳 金尾文淵堂



家庭雜誌
第四卷第一號
明治三十九年一月一日發行

理想の影

新年の光、見よや君、
寒風あらぶる窓の下、
咲くや、清香の、梅一輪。
たのしみまてる、長閑けさの、
雪霜の後に來べき日の、
春の姿をこゝに見よ。

家庭の光、見よや君、
四面闇なる世の底に、
照るや、燦爛の、星一點。
あこがれのぞむ、我が戀の、
革命の後に來べき世の、
理想の影をこゝに見よ。

我輩の家庭主義

太古の共産制　近代の私有財産制
共産社會の再來　家庭の意義

堺利彦

夫婦、親子、兄弟等の者が一家に住みて一家族を成し、若干の財産若しくば收入を中心として共同生活を營む、是が今の世の家族制度であるが、此の制度は何時から始まつたもので何時まで續くべきものか、又此の制度の始まらぬ以前は如何なる有樣であつたか、此の制度の終を告げた後は如何なる有樣になるであらうか、それらの事を少し考へて見たいと思ふ。

最初人間の社會が共産制を取つて居た事は、學者の間にモウ疑ひのない所である。共産制とは、一群の人が財産を共有して共同生活を營むの制度である。人類が多數群集して社會生活を始め、漁獵を事として山や海を漂ひあるいて居た時、其の武器や、獲物や、決して個人の私有では無かつた。後、漸く一地方に土着して、牧畜、農耕を事とするに至つても、其の土地や、家畜や、農作物や、決して個人の私有では無かつた。即ち其の一群、一部落の人は、皆な其の財産を共有して、共同生活を營んで居たのである。勿論、其の團體の間に分業はあつて、或者は機を織り、或者は船を作り、或者は家を建て、或者は田を耕し、或者は漁獵を爲して居たのであるが、然しながら、其の機を織る女が、夫の爲にのみ衣服を作るとか、或は其の織りあげた反物を人に賣るとか云ふ事はなく、彼女は只だ其の一部落（一社會）の全體の爲に衣服の料を織つて居たのである。船を作る者も、田を耕す者も、皆な其の作りあげたものを己れの所有とするのではなく、只だ其の部落全體の爲に作るのである。さる代り彼等自身の衣食住は又其の部落全體より供給せられるのである。要するに、彼等は衣食住の必要物を、生産するにも、分配するにも、皆なそれ〴〵の分業の下に、申合せをして助けあつて居たのである。それが乃ち共同生活である。

處が、此の共產制が漸く破壞せられて私有財產制の時代となつた。私有財產制とは、從來の如く一社會の間に財產を共有する事を止めて、一個人の手に別々に財產を私有するの制度で、人畜を私有し、土地を私有し、金錢資本を私有し、家屋、器械、船舶、鐵道、鑛山、山林等、あらゆる財產を私有するの制度である。即ち現今の社會も亦た此制度の一現象で、昔は主として奴隸、家畜を私有し、中頃は主として土地を私有し、最近には主として資本を私有して居るのである。近く之を說明すれば、封建時代の大名は即ち大なる土地の私有者で、今の世の富豪は大なる資本の私有者である。共產制破壞の原因に就ては、大ぶん話が込みいつて混雜を來すの恐があるから、何れ改めて書く事にするが、兎にかく是も亦た社會進化の一階段として其の必要があつたに相違ない。そこで新に起つた私有財產制の結果として、此の社會が急速なる大進步を爲した事は、亦た少しも疑ひない。然しながら此の私有財產制が人情を傷つけた事も、亦た實に甚だしい。

然らば何時から此の私有財產制が始まつたかと云ふに、專門學者の說に依ると、人間社會の歷史を假に十萬年のものとして、其中九萬五千年は共產制の社會であつたと云ふ。さすれば私有財產制は寧ろ近代の事であつて、人間社會全體の歷史より見る時は、僅に一小時期の現象である。我々は此の制度の間に生れたるに依り、又我々の普通に歷史と稱するものも、亦た此の制度の時代のみに限られたるに依り、我々は兎かく此の制度を以て永久不變のものゝ如くに思ひやすいけれど、少しく眼を遠方に放つて、數萬年の昔を回顧する時には、僅々五千年間やそこらの私有財產制度の歷史を、恒久のものゝ如くに考へて居た愚かさを、我と我から嘲るに至るであらう。現に南洋諸島の蠻族の間などには、今でも共產制の社會の名殘を見ると云ふでは無いか。日本の田舍などにも、多少の共產制を殘して其の昔を偲ばせる樣な村落があるでは無いか。して見ると愈々、私有財產制の時代の短い事が知られて來る。

そこで此の大體の社會組織の變遷を、家族制度の變

遷といふ側から見ると、ザットこんな事になる。

最初の共產制の時代に在つては、まだ一夫一婦の制が始まつて居らぬので、或は雜婚といふか、或は群婚といふか、何にせよ、女子が數人の夫を持ち、男子が數人の妻を持つといふ有様で、血緣の範圍が不明瞭であるので、一家族の形が甚だ大きく、其の輪廓が漠然たるものであつた。即ち此の時代は謂はゆる母系制度で、明白なる親子の關係は母と子との間ばかりで、父の情は未だ全く無く（或は甚だ少く）、其の家族制度は只だ子に對する母親の本能性ばかりを基礎として居たのである。然るに一夫一婦（若しくは一夫多妻）の制度になつてより以來、家族の形は甚だ明瞭となり、其の範圍も亦た縮少せられた。それと同時に私有財產の制度が起つた。私有財產制と一夫一婦制との關係も甚だ面白いが、それは例の改めて云ふとして、こゝには只だ同時に起つたものとして置く。それで私有財產制が起つて以來、其の私有財產を中心とした一夫一婦（若しくは一夫多妻）の一家族が、新に社會の單位を形成

して、其の單位と單位との間、即ち一家族と一家族との間、即ち一私有財產と一私有財產との間に競爭が起つて來た。

それで思ふに、人間の社會は、其の數萬年間の共產制の時代に於て、密接なる共同生活の結果として、廣く相依り相助くるの習慣を作り、其の一社會中に於る兄弟同胞の情を養ひ來つたのであるが、私有財產制が起つて以來、折角の其の美風は毀たれて、一社會中を兄弟同胞と思ふが如き廣き、淸き、大いなる人情の發達は傷はれてしまつた。共產制の時代に於ては、家族の形は漠然として大きく、而して社會の形は小さく、時としては一家族即ち一社會であつたかも知れぬが、私有財產制の時代に於ては、社會の形が大きくなると同時に家族の形が小さくなり、家族は社會を組織する單位となり、細胞となつた。前の小社會の内部は密接なる共同生活であつたが、後の大社會の内部は各細胞相爭ふの生活である。勿論、後の大社會と雖も、亦た是れ一個の共同生活には相違ないが、其の形の大きく

なつたゞけ其の共同の意義は甚だ薄弱となり、各細胞の間に隨分激烈なる競爭が行はれて居る。そこで此の大社會に於ては、眞の密接なる共同生活は只だ一家族の間にのみ行はれる事となつた。昔し一社會の全部に行はれた、其の淸き、美しき人情は、今は只だ一家族の內部に押し込まれてしまつた。故に今日の社會に於ては、家族生活が非常に尊いものになり、外部の社會が暴風吹きすさぶ暗黑の世であるだけ、殊に著しく其の光彩を放つて、人間社會本來の人情を、姑くこゝに縮寫して居るのである。

　然しながら、前にも云ふ如く、此の私有財產制度も亦た社會進化の必要なる一階段で、一方に斯く人情の美を傷うたとは云ふもの丶一方に產業の發達となり、財力の蓄積となり、智識の進步となり、謂はゆる今日の文明を作り出したものである。殊に、一夫一婦制度の結果として、父子の關係が明かになり、父といふもの丶情を養はせたのは、人情の上に於ても亦た非常の進步であつて、父母、親子の情は、始めて茲に完成

したと云はねばならぬ。要するに、近代の社會は、社會全體に於る人情の廣さを失うたが、家族間に於る人情の深さを得たのである。

　斯くの如く、私有財產制は僅々五六千年の近代史に於て、過去數萬年の共產制を破り、其の家族制度を變じ、其の人情を變じて來たが、其の進步は實に急速なもので、其の極、今や將に二度目の大變遷を遂げんとして居る。即ち今の社會は、其の單位たる細胞と細胞との競爭の結果、一方に少數の巨大なる細胞(即ち富豪)を作り、一方に大多數の微細なる細胞(即ち貧民)を作り、餘りに共同生活の意義に遠ざかつて來た。それと同時に、殖產工業の事が大仕掛になつて、總てが多數人民の組合仕事(即ち社會的)になり、モウ區々たる競爭を許さぬ事になつた。そこで私有財產制は今や正に其の終末の期に達して、再び元の共產制に立返らうとして居るのである。即ち社會全體の間に密接なる共同生活を爲すべき時期に達したのである。即ち少數なる富豪の手に在る莫大の財產を、此の社會の手に

受取つて人民全體の共有と爲し、人民全體の分業と組合とを以て生産分配を行ひ、何千萬、何億萬の人類が一團となつて、國家全體、或は人類全體の間に、密接なる共同生活を行ふべき時期に達したのである。

更に之を家族制度の側より見れば、一家族の内部に押込まれて居た人情の美を、再び押し廣げて元の如く全社會に及ぼすのである。即ち國家全體、人類全體が眞に一家族の如くになり、眞に兄弟同胞の情を以て相交る事になるのである。

其の結果、家族の輪廓が又漠然となつて、自然に他の更に大いなる社會生活と混ずる事になるであらう。さりとて何も是が昔の野蠻時代に返る譯ではない。昔の共産制は其の社會の範圍も小さく、又其の相依り相助くると云ふのも頗る單純なもので、一社會中に於る兄弟同胞の情と云つても實は甚だ粗大なものであつたが、將來の共産制はそれと違ひ、其の社會の範圍は國家全體、人類全體の大いさとなり、相依り相助くるの自覺が、明確に、切實に、仔細に、各人の心に刻まれて

正しく、清く、美しき眞の兄弟同胞の情が廣くして且つ濃かに輝きわたるであらう。殊に、昔の共産社會に於ては、離婚の行はれたが爲に父の情の發達を見なかつたが、將來の共産社會に於ては、此の自然なる親子の關係が、始めて眞に美しく發達するであらう。

今の家族は、外部の社會の暗黑の爲に、一人其の光を放つとは云ふもの丶、何分にも財産(若しくば收入)を中心にして組織せられて居るので、夫婦、親子、兄弟等の關係が、どうしても十分に美しく發達して居らぬ。それで將來の共産社會に於ては、今日の如き、財産(若しくば收入)を中心としたる家族制度は崩れてしまひ、只だ夫婦、親子、兄弟等の愛情に依つて其の關係を結び、其の夫婦、親子、兄弟等の愛情が、今日の如く經濟上(即ち金錢上、若しくば生活上)の事の爲に傷つけられる事もなく、始めて眞に美しき發達を爲すであらう。

されば家庭といふ言葉も、將來に於ては今日の用法と稍や其の意義を異にするであらう。今日に於ては、

家庭とは近親血族の一群が、財產(若しくば收入)を中心として、社會より離れて生活する處、といふ樣な意味を有して居る。それで兎かく錢勘定の事が大問題となつたり、雇人とか、居候とか、掛り人とか、厄介者とかの階級があつたり、又最も惡しき事は、此の家庭を以て浮世の荒浪の避難、するが故に、自然に其の壁を高くし、其の堀を深くし、其の門を狹くして、能と隣人に遠ざかり、强いて世人と疎くし、少し極端に言へば、此の家庭の城廓に據つて社會を敵視するの傾きがあつたりする。然るに、將來の社會に在つては、家庭とは、只だ意氣相投ずる一群の人の共に住む處で、多くの場合、夫婦、親子が其の中心になつて居るは勿論であらうが、さりとて必ずしも近親血族に限るといふ譯はなく、隣人、友人、皆な其の好む所に從つて共に住むに支へは無い筈である。固より雇人もなく、居候もなく、掛り人もなく、厄介者もなく、我家と人の家との間に聢く嚴重なる區別もなく、往來自由、去就自在、公園と我家の庭とは接續し、公食堂と我家の台所とは同じ物になり、家庭は即ち小なる社會にして、社會は即ち大なる家庭と云ふ風になるであらう。

故に我が「家庭雜誌」は、今後此の觀察點の上に立ちて、今の家庭を以て將來の共產社會の卵と見做し、今の家庭の中に社會主義(即ち共產主義、共同生活主義、相互扶助主義)の思想を養ひ、能ふべくば其の理想の面影をそこに宿らしめ、一歩にても廣く其の美を社會に押し廣げる事を勉めたいと思ふ。又それと同時に、彼の錢勘定第一主義、階級主義、隣人世人疎遠主義、家庭城廓主義などといふ、今の俗惡卑吝なる家庭論に對して、手強き攻擊を加へたいと思ふ。

(猶は將來の社會の有樣を明瞭に想像したいと思召さるゝ諸君は小生の曩に反譯したる「百年後の新社會」及び「理想鄕」を御一讀あれ。「百年後の新社會」は本誌第一卷第六號に掲げたるものにて、只今は別に一册として發行して居ります。代價等は卷末の廣告欄にて御承知を乞ふ)

眞心のお年玉

安藤生摘譯

（一）

（丸山巖十翁の家庭、姉娘高子（廿四歳）、妹娘百合子（廿一歳）、及び從妹蓮子（廿二歳）、何れも正月の晴衣にて一室に集り、百合子と結婚の約束ある德澤直一の噂をして居る）

蓮子「ちよいと百合子さん、直一さんはどんなお年玉をおよこしなすつて？

高子横合より「ナアーンにも、針一本だつて寄こしやしないのよ、ほんとに直一さんは吝ん坊だわ、あれぢや百合さんと一緒になつても、終始澤菴でお茶漬を食べさせるに極つてる、それが違つたら私お目に掛らないことよ

蓮子「おやマア直一さんテそんな方ですの百合子さん、約束のあるアナタや、其の兄弟の高子さんにお年玉の一つも贈らないとは、何といふお始末な方でせうねえ

あの亀太郎さんだつて私に奇麗な手袋を下すつたし、夏原の清二郎さんも目の醒めるやうな寫眞帖を下すつたし、そして二人とも私の約束の人でも何でもありやアしないわ、只心安いといふ丈でさへそれなんですものねえ、それに私まだ外のお友達からも山の樣にお年玉を戴いてよ、嘘とお思ひなら百合子さんマア一度私の家に來て御覽、それは机の上一ぱいよ

百合子「そう？ 蓮子さんはお年玉を戴くのがそんなに嬉しくツて？ そして其の嬉しい物が山の樣にあるなんテまあお仕合せですわねえ

蓮子少しヤツキとなり「だつて百合子さん、あなた直一さんのこと何と思つてらツしやるの、假令お印だけでも寄すのが世間並だとは考へなくつて？

百合子「お印なんか私いらないわ、それに直一さんは、私がそんな儀式じみたもの欲しがらないことを善く知つてますからねえ

蓮子更にヤツキとなり「では高子さんには何故お寄しなさらないんでせう？

高子ツンとして『いゝぢやありませんか蓮子さん、百合さんも亦た何も言譯しなくてもいゝわ、どうせ寄さない人は寄さない人で、吝な男は吝な男に相違ないんだもの、私そう思ふわ、斷言してよ！

百合子『姉さんそりや餘んまりだわ、直一さんが世間並の事をしないのは何れ何か考へのある事でせう、私は屹度そうだと思ひますの、姉さんは一概に吝だの何のと仰やるけれど、私はまだそうは考へませんの

蓮子『お氣の毒さま、私はそう考へてよ、なぜッて御覽なさい、若し私が男だつたら、たとへ、自分の靴を賣つてゝも、約束の人にお年玉を贈らずには置きやしませんわ

高子我が意を得たりと云ふ見えにて『ほんとにそうよ、私だつたら借金してもそうするわ

百合子『それは皆さんの御勝手仕第、何とでもなさいまし、私はお年玉なんかどうでもいゝのですから、直一さんが幾ら吝だつて少とも構ひませんわ

蓮子『よしませうよモウ下らない話は、こんな好いお天

氣に家の中に引籠んで、直一さんの御評判ばかしして居るのは馬鹿げてるわ、さあ高子さん、百合子さんも一緒に、散歩でもしようではありませんか

折から母親次の室よりこゝを覗きて『これ〳〵お前達出かけるなら、序に此の葉書を出して來てお呉れ

百合子『ハイ畏まりました、姉さんサア行きませう

高子『餘り出たくもないが……マアお附合しませう

（三人つれだつて戸口を出かける）

母親『オヤすつかり忘れて居たがね、あの洗濯屋のお婆さんが先頃から病氣だと云ふのに、子供はあるし嘸困つてる事だらう、お前達一度見舞つてやつてお呉れでないか、そして何なりと不自由な物は遠慮なく云つて來るやうにね、私がそう云つたッて、よウく云ふのですよ

高子チヨット顔をしかめて『百合さんアナタ行つておやりなさい、貧乏人の病人なんか私眞平だわ

母親『そんな事を云ふものぢやありません、お前達、貧しいものを助けるとが出來るのは結構な身分ぢやない

か、高子なんぞはそれを有がたいとも思ひませんか
高子『それア有がたいとは思ひますさ、でも見舞に行く氣にやなれないのですもの
百合子『そんなこと云はずに姉さん行きませうよ、私ほんとに行きたいわ、可愛そうにアノお婆さんがマアどんなに困つてるでせう
母親少しキッとして『高子も一緒に行つておいでなさい
高子『行かなきやならないのなら行きませう、其の代り郵便出しには百合さん獨り行つて下さいよ
百合子『ハ、よう御坐います、サア參りませう、蓮子さんアナタも……
蓮子『え丶、私出ることなら何處でも可いの

(二)

(軒傾ける洗濯屋の表、三人の娘が戸口をのぞいて、百合子が先づ進んで内に入る)
百合子『お婆さん今日は、先頃から御病氣でしたつてねえ、どんなですの?
老婆丁寧に辭儀して『是はマアお孃様……ハイ〳〵有がたう御坐います、お蔭さまで段々宜しい方で御坐います

百合子『それは善い鹽梅でしたねえ、實はお母さんがね、どんなだか氣に掛るからお見舞に行けツてね、そして何ぞ御不自由な物があつたら、どうぞ遠慮なくそう云つて下さる樣にツてね
老婆『それは〳〵まあ有がたう存じます、かう病みふせつては居りまするし、子供は御坐いまするし、晦日の晩に德澤の旦那樣がお越し下さいませんでしたら、全く困りきる所なので御坐いました
百合子『マアそうでしたか、マア
老婆『ハイ、その德澤の旦那樣と申しますは、お名は直一樣と申しまして、矢張り私者の御得意先で御坐いますが、晦日の晩に思ひがけもなくお越し下さいまして色々な物をお惠み下さいました、お茶だの、お砂糖だの、おかちんだのと、それに子供にまで、シャツだの足袋だの、また外にお金まで戴きまして、お蔭樣でモウ何に一つ不自由な事は御坐いません
百合子『マアそうでしたか、それは善う御坐いましたの

ねえ

老婆「ハイもうこんな仕合せな事は御坐いません、あの旦那様はお年のお若いのに、何といふ行届いたお情ぶかいお方で御坐いませう、それに私が最初御辭退を申しますると、旦那様の仰るには、ナニ是は私に少し思はくがあつて、他へ贈る筈の年玉を止めにして、それを此方に持つて來たのだから、遠慮には及ばないと仰るので御坐います、それで私又申しましたので御坐いますよ、お若い旦那様の事ですもの、大切なお交際も御坐いませうに、それをお止め遊ばして、私共の様なものに此様にして戴きましては相濟みませぬと申しますると、イヤ何に、私の交際といふのはそんなに困つて居る人ではなし、それに年玉なんぞ贈らなくても私の心は善く知つて居て呉れるのだから、そんな事は心配しないで取つて置けと仰いましてね（婆は語りながらツイ嬉しさに涙聲になつて跡は云へなくなる）

百合子も嬉しさ喩へん方なき見えにて「それはマア善う御坐いましたね、若し又何ぞ足りないものでもありましたら今度は私の處にそう云つて下さいよ

老婆顔をあげ「ハイ〳〵、御親切様に誠に有りがたう存じます、其中よくなりましたら御禮に出まするで御坐いませう、

百合子「ではお婆さん隨分お大事に、左様なら

高子、蓮子「お婆さん左様なら

老婆「皆様どうも有がたう存じます、どうぞ奥様に宜しく申上げて下さいまし

（百合子は郵便局へ行き、高子と蓮子とは別れて各々その家に歸る）

（三）

（丸山家の座敷、百合子郵便局より歸り來る）

高子「オヤ百合さんお歸り、今ね、私スツカリ直一さんのとをお父さんとお母さんにお話しゝて居た處よ、先つき私が吝だの何だのと云つたのは、ほんとに濟まなかつたわねえ、私百合さんにお詫してよ、洗濯屋のお婆さんがあの話をした時、私心底から後悔したの、百合さんはほんとに肩身が廣いわねえ

母親サモ嬉しそうに『百合や、私も今迄直一さんの話を高子から聞いて感心しました、お前が財産や身分に目を付けないで、直一さんのやうな立派な人を見立てたのはどれほど仕合せだか知れませんよ

父親嚴十翁も怡々として『正月早々に善い話を聞いたものだ若いに似合はぬ德澤の心がけ、立派な世間の手本となる、つまらぬ虚榮や無駄な儀式に消えゆく金は、皆な此樣にして少しでも善い事に向けたいものだ、喃娘達、お互に是から氣をつけて、惡い習慣の改良に勉めませうぞ

百合子嬉しさに涙ぐみ『お父さん、お母さん、有りがたう存じます（をはり）



私は麥酒で御座います

私は麥酒で御座います。昨年の暮、隅田川の傍のアノ麥酒會社の暗い倉庫から取出されて、美しく飾つた店頭に置かれた時は、私實に天にも上つたやうな心地が致したので御座いますが、あゝそれも一朝の夢、極月の二十日といふに、古河とかいふ大金持の番頭が來て、幾千の仲間と共に私を買つて行き、どうされるとやらと心配して居る中に、私共十二本のものはひどく狹くるしい箱の中へ詰め込まれ「御歳暮」といふ生れもつかぬ因果な名を負はせられ、鑛毒に名高き彼の〇〇縣〇〇に宛てゝ東北行の汽車に載せられたのが、抑も情けない運の始まり。汽車から下ろされて〇〇樣のお邸には着いたものゝ、繩目も許されず其まゝ直ぐに〇〇郡長の所へ行けとの仰せ。こゝばかりはハテ不思議な、上官いら下役への贈り物、何か因緣でもありそうなと考へる間もなく、チラリと郡長樣にお目に懸つたまゝ、又しても「御歳暮」の札を舁がせられ、今度は一轉して鑛毒激甚地とやら聞き及ぶ〇〇村の村長の所へ來た。ハ・ア此頃鑛毒の聲が下火になつたのはコンナ譯か。村長は大喜び、「何ぞ新年にと思つて居た矢先、明日は早速之を贈らう」と、翌日はトウ〳〵「お年玉」と改名せられ、矢張り十二本の友達と一緒に〇〇といふ〇會議員の所へやられた。もう是れで繩目の耻も解けるかと思ひの外、今度は又〇〇といふ請負師、それから更に東京へ舞ひ戻つて某省の官吏へ行くと、細君の助言で其日の中に所屬長官の玄關に恭しく捧げられ、それから又羽が生へてトウ〳〵古河氏の臺所。今日は一月の十日、あちらにやられ、そちらに運ばれ、歳暮からお年玉と變り、一ケ月の旅行にサン〴〵弱らせられた揚句、トウ〳〵又始めの人の手に返つて來た。賄賂と虛禮とオベツカの道具に使はれるとて生れて來た私でもありませんのに、ぼんに何といふ不運なので御座いませう。思はぬ愚痴もツイ出るので御座いますわれえ。

婆アの皮（讀ちやん方の爲に）

深尾韶

ある處に、お父さんとおッ母さんと、若い娘等二人とで、樂しく暮らして居た家が御座いました。始めの間は、お金はあるし、大層面白く、毎日お仕事の暇々にはバイオリンを彈いたり、歌ッたりして、家内中まことに仕合せに暮らして居りましたが、或る年の冬、フトした風邪から、おッ母さんは病ひの床について、いろ〳〵看護の甲斐もなく、とう〳〵其年も暮の十二月廿六日の夕方、散ッて行く紅葉と共に、果敢なく黃泉に旅立ちました。あとに殘ッた娘等やお父さんの悲しみはドンなでせう。お正月が來ると云ふのに門松の仕度もせず、餅も搗かず。お葬式をして了ッてからは、丁度氣の拔けた人の樣に、ボンヤリとして三四日を過ごして了ひました。

その內に早くも一月一日となりました。今日は丁度おッ母さんが死んでから七日目に當るので、朝から和

尙さんを賴んでお經を讀んで貰ひ、お齋のお飯が濟むと、やがて三人してお寺まゐりに出掛けました。其の途中、田圃道を通り掛りますと、道の傍に一丈もあらうといふ大きな蛇が、恐ろしい顏をして、一匹の蟇を呑まうして、睨んで居りました。平素から大層慈悲心の深いお父さんは、之を見まして蛇に向ひ『コレコレ、蛇さんや、お前がお腹が空いて居るなら、何でも上げるから、其蛙を呑むのは止してお呉れ。今日は私の亡くなつた妻の初七日だから、私は其の蛙の命を助けてやりたい。もしお前が私の言ふ事を承知してくれたら、何でもお前の望み仕第なものを上げやう』と、サモ人間にでも賴む樣に言ッて聞かせました。すると流石の蛇にも言葉が判ッたと見え、お父さんの顏をつく〴〵と眺めて居りましたが、やがて彼處へスルスルと行ッて了ひました。

『元日から、先づ一つ生物を助けてやッた。死んだおッ母さんも、之を聞いたらサゾ喜ぶだらう』とお父さんは娘たちに話しながら、やがてお寺詣を終へて、其

日は家に歸りました。

其晩、娘等二人はお父さんに『お寢みなさい』と言ッて彼方の室へ行きましたから、お父さんも寢やうとして居ると、何だか娘の室で、聞き慣れない男の聲が聞えます。「ハテナ、誰だらう」と思ひましたけれど、其中にイッカ自分が寢付いて了ひました。

翌る晩も枕に就くと、又男の聲が聞こえます。聲を掛けて見やうと思ッてる中に、ウト〳〵と、又いつの間にやら眠ッて了ふので、其翌る日は娘に其事を聞いて見ました。けれども娘は唯『優しい親切な若い人ですが、何處の誰だかソンナ事は知りません』と言ふばかりです。『そして今夜も遊びに來ると言ひました』。

お父さんは娘等に向ッて『そんな知りもしない人を家に入れるものではありません。外觀の餘り親切な人は、心に恐ろしい計を持ッてることが多いものです。今夜は宵の內から戶締をして置いて、外から聲を掛けても返辭をせぬやうになさい』と言付けて、自分は其晩、寢ずに番をして居りました。

いつもの時刻になりますと、案の定、庭にガサ〳〵と枯葉を踏む足音が聞こえます。偖こそ來たな。けれど今夜はスッカリ戶締がしてあるから、入れなくッて彼奴必と困るだらうと、息を殺して障子の蔭から窺ッて居りますと、何か戶に打付ッた樣な音がしたと思ふ刹那、モウどこをドウして入ッたのか、娘の室でサモ面白さうな例の男の笑聲が聞こえます。お父さんは驚きました。戶を開けないで入ッて來るからには、何か屹度、魔物に違ひない。娘が魔物に捕ッて食はれるのではあるまいかと、青くなッて心配しましたが、その中に『左樣なら』といッて歸ッて行く樣子ですから、お父さんが障子を細目に開けて見て居ますと、こはソも如何に、男は戶の傍まで行くと急に大きな蛇になり、節穴からツル〳〵と拔けて、外へ行ッて了ひました。

お父さんは漸と、初七日の日に路傍で蛙を助けてやッた時、何でも好きなものやらうと蛇に約束したことを思ひ出しまして、蛇が娘等を貰ひたいと思ッて、若い男に化けて每晩々々こゝの家へ來るのだと云ふ事に

氣が付きました。さア大變、お父さんはガッカリしてモウ翌る朝は起ることも出來ません。

娘たちは、そんな事とは少しも知りませんから、大層心配して、お父なんを少しでも慰めやうとしますけれど、お父さんは一言も口を利かず、唯鬱ぎ込んで居るばかりです。娘等は困ッて了ッて、『お父さん、どうぞ其の心配のわけを談して下さい』と泣きながら願ひました。お父さんは漸うの事で口を開いて、蛇の事を話して、『お前達の中で誰か一人、蛇の處へ貰はれて行ッて吳れなければ、蛇は私の約束に違ッたことを怒ッてドンナ禍災をするかも知れないと申しました。妹娘の方は、これを聞くと『蛇の所へお嫁になんか、厭な事た』と橫を向いて了ひましたが、姉さんの方は流石年の上なだけに考へも深く、且又、大の孝行者でありますから、やがて顏を上げて『お父さん、それでは私が蛇の所へまゐりませう』。お父さんは、それを聞いて苦しさうに『ホントにお前が行つて吳れるか。それで私も安心した。親子二人を助けると思つて、厭だらう

がそれではチョイトでも行つて來ておくれ』と、それから、今夜蛇が來たら一緒に行く樣にと、色々仕度を致しました。

姉さんは、お父さんに願つて、大きな瓢簟を一個買つて戴き、それに上等のお酒を一杯入れ、其中に又縫針を五百本ばかり入れて、キッチリと蓋をして、それから着物を着換へ、身仕度をして蛇の來る時刻を待ッて居りました。

やがて蛇が來ましたので姉さんは『それでは今夜愈よ私があなたの所へ貰はれて行きます。サア御一緒に參りませう』と申しますと、蛇は如何にも喜んだ風で、庭に出ると直ぐ蛇の正體を顯はして、サッサと先に立つて行きますから、姉さんは用意の瓢簟を持つて、其跡に蹤いてまゐりました。夜は眞闇で、只星明りに少し先の方は見えて居りますが、蛇の跡に蹤いて行くと、其の二つの眼が大きな鏡の樣に輝いて、草の葉の數さえ數へることが出來さうです。

一時間、二時間、谷を越え、川を渡り、茨の中や林

の間を潜り拔けて、だん〳〵山深く分け入りまして、もう大よそ五六里も歩いたらうと思ふ頃——夜は最う彼是三時であらうと思ふ時分です——一つの大きな池の傍へ出ました。蛇は娘をチヨイと見返ッて、其まゝスーッと池の中へ入ッて行きました。『こゝが私の家だからお前さんも一緒に池の中へ入ッてお出で』といふ積りなのでせう。けれど娘が入ッて行かないものですから、蛇は岸から十間ばかり向ふへ泳いで行ッて、此方を振り返ッて待ッて居ます。娘は『蛇さんや、私はお前さんの樣に水の中へ入ることが出來ません。お前さんはお酒が好きだといふ事だから、私の代りに今このお酒を上げます』と、ポンと用意の瓢箪を池の中に投げてやりますと、蛇は嬉しさうに大きな口を開けて、パクリとそれを丸呑みにして了ひました。

けれども固い瓢箪の事ですから、お酒はチットも出て參りません。こんな時に蛇はイツでも大きな木に捲き付いて、腹の中の固いものを潰します。その蛇も直ぐ岸の上に上つて、其の長い身體を木に捲きつけて、

グッと一つ力を入れますと、腹の中でパチッと瓢箪が潰れました。スルトさあ大變です。五百本もある縫針が一時に、お腹の中へ刺さつて了ひましたから、いくら強い蛇でも、堪りません。バタリと其木から落ちて七轉八倒、暫らくモガいた末に、とう〳〵死んで了ひました。

『あゝ可哀さうな事をした。けれど、人間が殺される割をすれば、まあ善かつた。ドラ歸りませう』と、娘は丁度夜の明けかゝッたのを幸ひ、元來た方へ引返さうとしましたけれど、暗い林の中を傍目もふらずに歩いて來たのではあるし、それに人里はなれて何里といふ山奧の事ですから、道らしい道もなく、方角さへ判らないので、ホト〳〵途方にくれて了ひました。けれど大抵の見當をつけて行ッたら、マサカ歸れぬ事もあるまいと、やがて肚胸を決めて歩き始めました。

けれど、トテモ駄目でした。いくら行ッても〳〵、人家一つ見付からず、凡そモウ七八里も歩いたらうと思ふのに、人里らしい氣色もない。其中にソロ〳〵も

う日は傾いて來る、足は疲れて痛くなる、お腹は空いて來る。實に泣き出したいほどになりました。然し、忍耐して尚ほ歩いて行きますと、これが天の助けとでも云ふものでせう。遙か向ふに一軒の小さな家があッて、今夕飯の仕度でもしてゐると見え、細い煙が糸の様に立昇ッて居ます。娘はそれに元氣づいて、一生懸命に其處へやッてまゐりました。

「御免下さいまし」と、入口から聲を掛けますと、中から「ハイ、誰方？」といふお婆さんの聲がして、六十ばかりの女の人が出てまゐりました。娘は其日の一伍一什を話して「どうぞ、一晩泊めて下さい」と頼みますと、お婆さんはサモ氣の毒さうな顔をして「それはホントにお困りなさるでせう。けれども此處は通常の家では無いので……」と暫らく考へて居たが「お前さん、此の日暮に其處らでグズ〳〵して居ると、今に鬼共が歸つて來て、食はれて了ふに違ひない。此邊は鬼が原といつて、鬼ばかりの村、この家は鬼の住家です。私は此うして年をとつて居るもんだから、食べても旨くないといッて、鬼に食べられないのだが、お前さんの様な、若い美しい娘さんは、直に食べられるに決ッてゐる。今は鬼共が皆な外へ行ッてるから善いけれど、そうかうして居る中に夜にでもなれば、皆な歸ッて來るのだから、もうグズ〳〵しては居られない」と云ふのです。折から日は西の山の端に隠れて、塒を急ぐ旅鴉が悲しさうな聲をして西に東に飛んで行く。娘は今の今まで生きた空もなかッたものが、ヤレこれで助かッたと來て見れば、これは又話にだけ聞いたことのある鬼共の住家、今度こそは鬼の餌食になッて死ぬことかと思へば、張りつめた勇氣も俄に挫け、「私ドウしたら善いでせう」と、前後の正體もなくそこに泣伏して了ひました。

お婆さんは娘の脊中を撫で〳〵「まあ、そんなに心配せずともよい。それでは私が善い事を敎へて上げやう。幸ひ玆にお婆さんの皮があるから、お前さんがそれを着て、お婆さんの服裝をしておいで。そうすれば鬼が歸ッて來ても、お前さんをお婆さんだと思ッて、食べ

ないかも知れない」と、丁度そこに藏ッてあッたお婆さんの皮を貸してくれました。娘は喜んで直それを被りますと、ホントのお婆さん見た様に、顔は皺苦茶だらけ、頭はスッカリ白髪の人になッて了ひました。そしてお婆さんから老人の着物を借りて着まして、鬼共に見付からぬやう戸棚の中へソッと隠して置いて貰ひました。スルト間もなく青鬼だの赤鬼だの、幾匹も歸つてまゐりました。

青鬼「婆さん、今歸ッたよ。留守に誰ぞ來はしなかッたかえ。

赤鬼「オヤ何だか人臭いぞ。婆さん誰か泊めたナ。

と申しますので、お婆さんも娘も氣が氣ではありません。お婆さんは、鬼に嗅ぎ出されては、トテモもう隠すとは出來ないと思ひましたから、わざと平氣な振をして、

婆「泊めるとは泊めたが、トテモ食へる様なもんぢやないよ。僞だと思ふなら行ッて見るがいゝ。

と申しますと、鬼共は鼻をピコ〳〵動かしながら、

イキナリ戸棚の戸をガラッと開けました。

鬼「何だ。なるほど此んな婆さんか。こんな梅干婆ぢや仕様が無え。オイ婆さん、何だッて此んなケチな奴を泊めるんだい。若い娘でも泊めれば善いに。

と、ブツ〳〵言ひながら、彼方へ行ッて寝て了ひました。そして翌る朝になると、鬼共は又どこへか出て行きましたから、お婆さんは娘に向ひ「昨夜は嘸怖かッたでせう。それでは又鬼の歸らぬ内にお出掛けなさい」と、途中で鬼に逢ッてもよい様に、お婆さんの皮を着せたまゝ娘を出立させました。娘はお婆さんに、ようくお禮を述べ、道を聞いて出掛けましたが、どう間違ッたか、又道が判らなくなり、夕方ト或る村端に着いた頃は、モウお腹などペコ〳〵に耗いて了ッて、歩くことが出來ず、トウ〳〵或る小さな門構のある家の前で倒れて了ひました。

「オヤ〳〵マア可哀さうに、お婆さんが倒れて居る」と、其家のお妻さんがそれを見付けて、藥をくれるやら、暖めるやら、大そう親切に介抱してくれましたの

で、娘、オット、お婆さんは漸くに起きる事の出來る様になりました。スルトお妻さんは「お婆さん、あなたは何處の人か知らないけれど、其年になッて行倒れになる位ゐでは、ドウセお家もないのでせう。可哀さうにねえ。緩り養生して、働ける様になッたら、いつまでゝも好きな時まで、私の所に居て洗ひ張でも少しづゝ手傳ッて下さい」と心から親切の語、お婆さんは嬉しさやら羞かしさやらで、返辭も出來ずに默ッて俯向いて居りました。

二三日經ッて、お婆さんはスッカリ快くなッたので、働き出しましたところが、その達者な事、正直な事、親切な事、家中の人は皆な驚いて感心しました。それも其筈です、元より心の清い十八歳の若盛ですもの。

ところが、或晩、娘がお湯に入るとて、お婆さんの皮を脱ぐところを、家の息子さんがチラと見たので、お婆さんではないと云ふとが直に判ッて了ひました。若い娘だとなると其儘には置かれません。あの優しい氣立、忠實な心掛、是非我家のお嫁に欲しいと云ふの

で、翌日は娘を其お父さんの所へ送り届け、別に又お使の人をやッて、どうぞお嫁に下さいと頼みましたところ、お父さんは無事に歸ッた娘の顔を見て大そう喜び、二度と別れるのは辛いけれど、娘の幸福にもなることですから、とう〳〵それを承知して、或る樂しい春の夕、めでたく御婚禮を濟しました。そして、それからといふもの、娘はまことに夫婦仲も睦ましく、樂しい生涯を送りましたが、それに引かへて妹娘は、兎角我儘で、それも厭、これも厭といッて居た末に、自分から望んで、恐ろしい大金持へお嫁に行き、始の内こそ、姉さんなんぞの様に私は貧乏人へは嫁かないのよ」なぞと、威張ッて居りましたが、段々と夫がお酒を飲むやら、色々の惡い事をし出したので、終には毎日々々朝から晩まで泣いて暮らして居ましたとさ。めでたし〳〵。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

臺所廢止論

中尾傘瀨

近來、家庭の研究が一種の流行のやうになツて、新聞に雜誌に、乃至單行本に、此趨勢に應じて筆を着け論を立てたものが、甚だ尠なくない。『每日』記者の調査に據ると、東京市中で發行せらるゝ婦人と家庭とに關する雜誌だけが、四十幾種といふことである。また盛なりと謂はなければならぬ。然も未だ一人の大膽に臺所廢止を唱へた者の無いのは遺憾千萬である。

一人の臺所廢止を主唱した者の無きのみならず、却つて今日では、又昔に立ち戻つたやうに、料理とか裁縫とかいふ、舊來の家庭向のものを奬勵する氣味があらはれてゐる。これは或意味に於いて、確かに家庭の自覺でもあらうが、この自覺は既に遲い。今は料理とか裁縫とかいふものを、追々家庭の内より卻くべき機運に近づいてゐるではあるまいか。裁縫のことは後日に讓るとして、先づ茲には料理庖厨のことより、論を

始めやうと思ふ。

一概に臺所廢止と言へば、如何にも輕躁な、突飛な提議であるやうに聞こえるかも知れぬ。併し一家の經濟と婦人の修養といふことに就いて、深き誠實と、熱き婦人に對する同情とを以つて考へたる結果である。決して奇を求めて、殊更に俗論中に異を樹てむとするものではない。

讀者！今日我邦に在るやうな臺所が、戶每に一箇宛備へ付けられてある爲に、何れだけ一家の主婦が心と手とを勞しつゝあるか、又如何に多く時間と金錢とを徒費しつゝあるかといふことを、能ふだけ強く想像せられたい。先づ中以下の家庭に在つては、主婦は朝から晚まで臺所の仕事に、其心と其手とを、殆ど絕間なく働かし通しではないか。朝飯を濟ましたかと思へば、最う晝飯の準備、晝飯が了はつたかと思ふと、又晚飯の支度、といふ有樣で、何をする暇もない。假令下女を置いても同じことで、一人の人間は、やはりそれが爲に係かり盡くしてゐなければならぬ。否却つて

下女のゐる方が、仕事の數は殖えて來る。隨つて主婦の心遣ひや、塵振りは忙しくなるのみである。されば臺所といふ所は、

時間の經濟から言ッても、
金錢の經濟から言ッても、
又人間の經濟から言ッても、

餘程の不利益な、又不都合の甚しいものである。これは何時までも此儘にして措かれぬ。是非共、早く工夫改良しなければならぬ――大きく言へば、國家的性質をも帶びた一大問題である。

アメリカの家庭に於ける臺所が、甚だ整頓したものであッて、厨房具の棚の傍には、料理を爲ながら新聞雜誌を讀める設備にしてあるといふ話も聞き、又餘り勝手働きに厭いた時には襷掛けてピヤノを彈くといふ具合にもなつてゐると聞くが、それだけにしてあるだけ、臺所といふ所が、彼邦でも厄介視せられてゐることがわかる。それでボオルソンといふ博士は、食物製造に科學の力が應用せらるゝに隨ッて、臺所は次第に

家の不必要なる部分となるであらうと云ッてゐる。余も亦博士と同じく、我邦に於いても之を冀ふものである。

蒸氣力、電氣力の發明に依つて、すべて人力を要したものが、一大變革を遂げてゐるのに、臺所だけは尚依然として舊時の体裁と習慣とを殘してゐるのは頗る奇怪である。例へば應接間にはテエブルを据ゑ、客室には油畫を飾ッてゐるのに、**臺所で行ふ料理法は、悉く祖先傳來の太古の形式である**。總じて家の中で最も進歩してゐない部分、**寧ろ非文明的なる所は臺所であると謂ッてよい**。

之に就いて余の意見といふは、斷然臺所を廢して仕舞ふことであるが、それを決行する迄には、**臺所に代はるものを豫備して置かなければならぬ**。即ち先づ一村一町で言ふならば、徳川時代に行はれた五人組――向ふ三軒兩隣――といッたやうなものを基礎として、**數軒若しくは十數軒、相談の屆く限り大合同して、一箇の飯焚所を設け、其處より毎朝（一回になりとも、**

三回になりとも)飯を配達させること、恰も今日牛乳を配達させるが如くするのである。それから副食物も同じ仕組で配達させたらばよい。これは出來にくい相談のやうでもあるが、初は同志の者に依ッて組織したならば、必ず容易に實行を見ることの出來る工夫と思ふ。尤も其飯炊所(若しくは副食物調理所)には、二三のクックや目附を置く必要があらうから、それらの費用は組合員の分擔にしなければならぬことは言ふまでもない。或は爾せずとも、悉皆此仕組を他に請負はして行らせても、却ッて世話がなくてよからう。さうしてゐる中には需要供給の原則通り、是等の必要を充たす爲の適當な供給者があらはれて來るに違ひない。例せば今日に於いても學校寄宿舍の賄を請負はせるのたぐひである。其初の程は少々の不便も、又組合員相互の不平も全く無いではなからうが、次第に工夫を積んで行けば、それらは改められるはずである。

　さて以上の如くすれば、今日まで一家別々に構へてゐた竈——臺所は、速に廢することが出來やう。かくて主婦(若しくは一家の中の誰にても)が、臺所で働かなくともよくなれば、吾々の家庭は更に幾段の幸福を増して來るわけで、又尤も經濟の趣意にも叶ッて來るわけである。

　實に今日の如き家庭の臺所にては、經濟上不利益であるばかりでなく、家庭の人をして、より高尚なる趣味に耽らしむる餘裕を削ぐものである。音樂に進まうとしても、讀書に進まうとしても、(世間の姉妹の中には、既に音樂室、家庭文庫等を設けられた方もあらうが)、多くの時間を臺所に消されてゐては、實際志はあッても、なか〳〵出來るものでない。殊に新教育を受けて、新家庭を組織する者に取ッては、臺所は高尚なる理想實現の大障害物である。切に言へば、臺所は品性修養の妨を爲すものである。若し天才ある婦人ならば、其婦人は臺所に入ッたが爲に、可惜天才を沒却して仕舞ふことであらう。これを思へば、今日家庭の中に在ッて、最も慘酷に婦人を殺す所は臺所であらう。

　それで余は家庭生活の趣味を高め、婦人に修養の時

んで行けば、それらは改めらるべきはずであ
さて以上の如くすれば、今日まで一家別々に構へて

間を與へ、或は天才ある婦人には其天才を發揮せしむる機會を與ふるため、一日も早く此臺所廢止、飯焚所設置を慫慂するものである。これは一家の幸福を增進するのみならず、又實に人類進歩の爲である。故に余は敢て勸めるが、婦人方自身より、之を主張して、先づ一家の主人を動かし、一致協力して各々實行に急がれたい。臺所は婦人の權力範圍で、婦人方さへ決心が付けば、天下の男子は皆喜んで合槌を打つのである。今日、吾々の家庭に向けらるゝ高尙なる注文は種々あるが、此問題を先に決定してかゝらねば、何事も捗取るまいと思ふ。それでなくとも、今日の家庭問題は家庭其者と同伴せず、婦人問題は婦人其者と同伴せず議論は何時も議論の目的物より數步も數十步も飛び離れてゐるのは、畢竟婦人――家庭の全權者が遲れてゐるゆゑであらうと思ふ。而して之を救ふには、彼等に先づ充分修養の時間を與ふる必要があるではあるまいか。

△讀者諸君に御紹介致しますが、「臺所廢止論」の主唱者中尾傘瀨君は岡山縣高梁高等女學校の先生であります。記者は今の女學校の先生の中より斯の如き大膽なる議論の出でたのを見て實に愉快を禁じ得ぬ者であります。記者の小著「家庭の新風味」の中にも「飯焚配達會社」の出來る事を希望して置きました。諸君若しお序あらば、それをも御參照を願ひます。又記者の新しく出版しました「通俗社會主義」といふ小册子の中にも次の如き事が書いてあります。猶ほ本號の「我輩の家庭主義」とも御參照を乞ふ。（堺生）

日常生活の無駄事

（「通信社會主義」の一節）

△假に茲に一町内に百軒の家があるとしませう。すると、其百軒の家に丁度一百個の、小さな、不便利極まる竈があるに相違ない、次に又、丁度百個の、小さな、不便利極まる流し元があるに相違ない。其外、丁度一百個宛の、米櫃、米とぎ桶、鍋釜の類があるに相違ない。そして、丁度一百人の細君が、別々に飯炊をし、掃除をし、洗濯をし、買物をして居るに相違ない。そして其買物の如きは、茶や、砂糖や、味噌や、漬物や、魚や、肉や、何れもホンの少しづゝ、三錢、五錢、十錢、廿錢の小買をして、不經濟を極めて居るに相違ない。野菜物などの小賣値段が卸賣値段の十倍にもなる事は、決して珍らしくはありません。

△それで若し此仕組を改良して、一町内に一個の大きな料理所を作り、一個の大きな洗濯所を作り、一個の大きな食堂を作ると云ふ樣にしたならばドウでせう。そして食料品や何かは、總て百軒分一まとめにして卸元から買入れる事にして、百人の細君達の上から、何人づゝか飯炊番、料理番、洗濯番を出す事にして、順番にやつて行く事にしたらドウでせう。私の思ふには、第一、總ての費用が幾ら儉約になるか知れず、次に細君達の手が幾ら省けるか知れず、そして家内が幾ら面白くなつて、町内の交際が幾ら睦まじくなるか知れぬ。

に在つて、最も慘酷に婦人を殺す所は臺所であらう。

三回になりとも）飯を配達させること、恰も今日牛乳を配達させるが如くするのである。それから副食物も同じ仕組で配達させたらばよい。これは出來にくい相談のやうでもあるが、初は同志の者に依ッて組織したならば、必ず容易に實行を見ることの出來る工夫と思ふ。尤も其飯焚所（若しくは副食物調理所）には、二三のクックや目附を置く必要があらうから、それらの費用は組合員の分擔にしなければならぬことは言ふまでもない。或は爾せずとも、悉皆此仕組を他に請負はして行らせても、却ッて世話がなくてよからう。さうしてゐる中には需要供給の原則通り、是等の必要を充たす爲の適當な供給者があらはれて來るに違ひない。例せば今日に於いても學校寄宿舍の賄を請負はせるのたぐひである。其初の程は少々の不便も、又組合員相互の不平も全く無いではなからうが、次第に工夫を積んで行けば、それらは改められるはずである。

さて以上の如くすれば、今日まで一家別々に構へてゐた竈——臺所は、速に廢することが出來やう。かくて主婦（若しくは一家の中の誰にても）が、臺所で働かなくともよくなれば、吾々の家庭は更に幾段の幸福を增して來るわけで、又尤も經濟の趣意にも叶ッて來るわけである。

實に今日の如き家庭の臺所にては、經濟上不利益であるばかりでなく、家庭の人をして、より高尙なる趣味に耽らしむる餘裕を削ぐものである。音樂に進まうとしても、讀書に進まうとしても、（世間の姉妹の中には、既に音樂室、家庭文庫等を設けられた方もあらうが）、多くの時間を臺所に消されてゐては、實際志はあッても、なか〳〵出來るものでない。殊に新敎育を受けて、新家庭を組織する者に取ッては、臺所は高尙なる理想實現の大障害物である。切に言へば、臺所は品性修養の妨を爲すものである。若し天才ある婦人ならば、其婦人は臺所に入ッたが爲に、可惜天才を沒却して仕舞ふことであらう。これを思へば、今日家庭の中に在ッて、最も慘酷に婦人を殺す所は臺所であらう。それで余は家庭生活の趣味を高め、婦人に修養の時

間を與へ、或は天才ある婦人には其天才を發揮せしむる機會を與ふるため、一日も早く此臺所廢止、飯焚所設置を慫慂するものである。これは一家の幸福を増進するのみならず、又實に人類進歩の爲である。故に余は敢て勸めるが、婦人方自身より、之を主張して、先づ一家の主人を動かし、一致協力して各々實行に急がれたい。臺所は婦人の權力範圍で、婦人方さへ決心が付けば、天下の男子は皆喜んで合槌を打つのである。今日、吾々の家庭に向けらるゝ高尚なる注文は種々あるが、此問題を先に決定してかゝらねば、何事も捗取るまいと思ふ。それでなくとも、今日の家庭問題は家庭其者と同伴せず、婦人問題は婦人其者と同伴せず議論は何時も議論の目的物より數歩も數十歩も飛び離れてゐるのは、畢竟婦人――家庭の全權者が遲れてゐるゆゑであらうと思ふ。而して之を救ふには、彼等に先づ充分修養の時間を與ふる必要があるではあるまいか。

△讀者諸君に御紹介致しますが、「臺所廢止論」の主唱者中尾傘瀬君は岡山縣高梁高等女學校の先生であります。記者は今の女學校の先生の中より斯の如き大膽なる議論の出でたのを見て實に愉快を禁じ得ぬ者であります。記者の小著「家庭の新風味」の中にも「飯焚配達會社」の出來る事を希望して置きました。諸君若しお序あらば、それをも御參照を願ひます。又記者の新しく出版しました「通俗社會主義」といふ小冊子の中にも次の如き事が書いてあります。猶ほ本號の「我輩の家庭主義」とも御參照を乞ふ。（堺生）

日常生活の無駄事

（「通俗社會主義」の一節）

△假に茲に一町内に百軒の家があるとしませう。すると、其百軒の家に丁度一百個の、小さな、不便利極まる竈があるに相違ない。次に又、丁度一百個の、小さな、不便利極まる流し元があるに相違ない。其外、丁度一百個宛の、米櫃、米とぎ桶、鍋釜の類があるに相違ない。そして、丁度一百人の細君が、別々に飯炊をし、掃除をし、洗濯をし、買物をして居るに相違ない。そして其買物の如きは、茶や、砂糖や、味噌や、漬物や、魚や、肉や、何れもホンの少しづゝ、三錢、五錢、十錢、廿錢の小買をして、不經濟を極めて居るに相違ない。野菜物などの小賣値段が卸賣値段の十倍にもなる事は、決して珍らしくはありません。

△それで若し此仕組を改良して、一町内に一個の大きな料理所を作り、一個の大きな洗濯所を作り、一個の大きな食堂を作ると云ふ樣にしたならばドウでせう。そして食料品や何かは、總て百軒分一まとめにして卸元から買入れる事にして、百人の細君達の上から、何人づゝか飯炊番、料理番、洗濯番を出す事にして、順番にやつて行く事にしたらドウでせう。私の思ふには、第一、總ての費用が幾ら儉約になるか知れず、次に細君達の手が幾ら省けるか知れず、そして家内が幾ら面白くなつて、町内の交際が幾ら睦まじくなるか知れぬ。

動物虐待税

（犬が人力車の先引をする話）

祿亭生

私の住居から音無川を一條隔つる、直ぐ向ひの三重縣では、腕車の先引に犬を使ひますので、私は此間或所へ行かんとて其の車に乘つて見ましたが、犬と言ふものは思ひの外に強い動物で、少くとも人を先引にした位の力はある樣に見えました。けれども有繁小さいもの丶事故、人間程の力を出して長く疲れずには續きません。車夫の恐ろしい聲に叱られ鞭うたる丶時や、急なる阪を登る場合に、汗を流し舌を吐出し、促迫した呼吸を喘ぎ〱走りましたが、僅かな水溜を見るとスカさず之れに口を着けて、裂けさうな喉を潤ほし、小さき溝でもあれば燃ゆる樣な身を浸して之を冷さうと致します。又この犬が折々兩便を催して立ちどまりますと、車夫はその繩を以て激しく引張りますので、少し〱之を洩らすのみで直ぐと又駈け出します。私は姑らく此の有樣を見て、見るに忍びぬ樣になり、犬を放してやれと車夫に言ひつけましたが、彼は容易に之れを聞きません。それでは成るたけ車を急がぬ樣にし、犬にも水を呑んだり兩便をする時を十分與へさす事にして進みましたが、軈て小川に沿ふた山道にか丶りますと、木の根や岩角に衝きあたつて、車の動搖が激しくなりました。そこで私は何故こんな所を無理に車に乘つて犬と車挽を苦しめ、又自分にも腰の痛みを耐えねばならぬかと言ふ事に氣がつき、とう〱車から下りて少しの荷物と上着を之に積み、テク〱と歩行き出しました。

暫らくして、とある阪道にか丶りますと、後ろの方から砂烟を立て丶急いで來る一輛の腕車が、これも犬に先引をさせて居ましたが、私等がそれに道を讓る間も遲しとつき拔けて行く。車の上なる客は中折帽子に焦茶色の外套を着た當世風の紳商らしく、急げ〱と命ずる聲と共に、彼の車夫はその犬に夥か鞭をあて勾配急なる道を十四五間も登つて行きましたが、其の登りつめとも思はる丶あたりに、山の片腹なる崖の隙から

チヨロ〳〵と出水の流るゝ所に到り、彼の犬は遽かにうち倒れて仰向になり、水の溜りに背をすりつけ、岩に喰附いてその滴りを吸はんとする様に見えました。彼の車夫は自分の息も絶々に大喝一聲叱咤して見ましたが、憐れなる犬は恰も覆へされたる龜の様に、唯その足を腕くばかりチツトも歩き出しません。其時鳥渡行止つた車の上で何やら呟く聲がすると、イキナリ車夫は足を揚げて激しく犬を蹴り飛ばし、首縄をとつて無理やりに曳ずり出しましたが、丁度その時私は此處へ追附き、此の有様を見て思はずハツと聲をかけると同時に、彼の犬もキヤン〳〵と悲鳴を上げて走出し、坂を下りて道を曲がり、遠く彼方の山蔭に隱れて仕舞ひました。

それから私は道々私の車夫に向ひ、種々と動物虐待の話をしてやりましたが、彼は私の言ふ事を聞いて不思議さうに『私等は立派に畜犬税と言ふものを納めて、お上の許しを受けて居ますので、巡査に見られても構ひません』と言ひましたが、私は『その畜犬税と言ふものは縣廳や村役場へ納めるものであらう。假令へ金錢を以て犬の骨折に代へるとしても、その税金が一厘も犬の手に入らぬではないか。又我々は他人から許されても惡るい事をしてはならぬ。假令へ許されて爲す事が皆正しい事としても、車夫が畜犬を虐待するは、知事や警察官が許したばかりで、肝心の犬から許されたのでは無からう』斯う言ふ風でマルで小供を對手の様に、一時間ばかりも話しましたら、漸くその疑が解けて彼は目を醒ました様でありました。

私はその翌日家へ歸つてから、車夫の言ふた事を思ひ出しつく〴〵と考へて見ました。『お上へ税を拂ふて犬の虐待を許して貰ふ』何と奇怪なる理窟ではありませんか。けれ共更に奇怪なるは此の奇怪なる理窟が、啻に無教育な車夫の仲間だけでなく、汎く一般の社會にも是認せられて居る事であります。多くの家庭に於て子供は親達の許しを受けて下婢に無理な事を言ひつけます。資本家は工業税を納めて職工を虐待します。醜業者は貸座敷税を拂ふて人の子を賣買します。嗚呼此の様な奇怪な理窟が正當なものと認められる弱肉强食の世が、何時まで續くものでしようか。

痛嘆すべき大學生

（新聞三面記事を讀む）

ふかを生

私共は、今の社會組織が如何に不完全にして、罪惡を犯し易くなつてゐるかを知り、且つ之を匡救する方案を考へて見たいといふ希望から、常に新聞の三面記事に多大の注意を拂ひ、興味を以て之に對することでありますが、昨年末に際しては野口そゑ子事件やら醫科大學生の女殺しやら、甚だ悼ましく、且つ何とやら此の人間の弱點が許かれたやうな心地のする記事を見たのであります。而して十二月二十六日の『二六新聞』は更に左の如き記事を掲げて居ります。

高等師範學校教授にて外國語校教授を兼ぬる岡倉由三郎（三九）といふあり。過る年伯林に留學を命ぜられしかば、學者氣質の打喜びて本郷千駄木町（現今は同區丸山新町十七番地）の留守宅は妻初瀨（三二）と知已なる醫科大學生皆川清太（新潟縣人）等に委せて故國を後に旅立ちつ。異鄕の風土に身も害はず專心道を窮めて目出度く歸朝し久々にて我家庭に入りしは今年の梅咲く一月の中旬。閉ざし勝なりし門も是より開かれて春立つは梅のみかはの情あるべきに不思議や妻初瀨の素振は青と曇りて冷けく、兎もすれば涙に霑む眼の物怯る風情ありほつとつく息も力なく浮立たれどさりとて病氣とも思はれぬに由三郎は胸痛め居る內、皆川は同家を去りて同町五番地東陸館に引移り更に同區東片町百四十五番地なる富國館に轉じぬ。皆川の居らずなりてより初瀨が物思ふ樣は愈々目立つ程に由三郎は合點行かねど現在の妻を疑ふ事非なるやう思はれて其儘に過ぎ居りしが、一夜初瀨は心決せし樣にて、夫の前に犯せる罪を懺悔せんといふに、由三郎は打驚けるが、聞けば由三郎遊學の途に上りて後初瀨は皆川に言寄られて道ならぬ褄重ねしつ、不義の快樂に耽り居たるも、夫歸朝しては流石女の、重き罪は身を責めて堪え得ず、さては懺悔するに至れるなりとの事に、由三郎は呆れ果て丶言葉もなかりしが、假し懺悔したればとて其儘にすべき事にあらねば直に初瀨を離緣し、姦夫皆川は終に大學を逐はれぬ。

此の記事によりて吾々は、愛情を閑みする結婚が如何に人間社會を毒し、而して聖人めかしたる道德先生の唱ふる禁慾主義が、如何に力なきものなるかを切實に感ずると同時に、妻を棄て丶（然り棄て丶）夫獨り遠く遊ぶの風が、一日も早く改良せられんことを望むものであります。

花言葉

久田二葉

いろ〳〵の花をとり合せて友や同胞へ送りますと、それで我等の思ふことが傳へられるとは、隨分多趣味な方法でせう。此雅びた花言葉が、通信法の發達しなかつた前土耳古で既に解釋され、十九世紀になつて佛國の秘密通信に用ゐられ、遂に今日に至つたのですがまだ〳〵ホンの眞似に過ぎませぬ。

△野バラ(白)　希望。心に絶えず思へども。
△野バラ(黄)　汝はよく語る。
△薔薇の蕾　無邪氣。純潔。少女。
△薔薇の花　美。美人。喜び。愛。
△白バラの蕾　處女心。
△白バラの花　清淨。君あつてこそ。
△黄バラの蕾　夫婦の愛。
△同　花　妬ましい。
△紅バラの蕾　可愛らしい。羞かしい。
△同　花　戀のなやみ。
△薄情の苔にて被はろる薔薇　疎遠。
△紅と白とのバラの花束　温き心。

△バラ一輪に添へたる草束　思ふものを友より受けむ。
△満開のバラ一蕾の上へ輪な二つの　秘密。
△綠葉と蕾のバラの小枝つきたる　修養。健在なれ。わが事業
△ひとつバラの葉　われは惑へり。微恙。
△人〳〵の一つ〳〵に薔薇の瓣なりたる　運命。失望。
△ホーソーン(バラの一種)　希望。幸福なる家庭。
△石竹の蕾　少年。
△同　花　無慾。淡泊。
△紫石竹　豫期せし成功。
△白石竹　誠實。
△匂ひ石竹(カーネーション)　油斷。才子。
△淡紅石竹　亡き人の追懷。
△紅石竹　意氣投合。
△有毛石竹　天才。秀才。
△絞色石竹　愛兒。
△石竹の枝葉　舊友。純朴。
△石竹の花束　眞心。我を知れ。

以上バラと石竹だけのを一見してさへ隨分こじつけなのもあり、いかゞはしいのもあり、間違ひ易いのもありますが、我々は面白くないのを捨てゝ新たによい

意味を表はす花としてもよろしく、また大体斯くと知つて居て、さて實際送られた塲合には更に趣味多く解釋してもよいのであります。

元來バラや石竹は歐米で廣く愛賞せられるものだから、斯く花言葉も覺束ない乍ら拾れはましたが、我々が最も手近に得られる花には之が出來ぬのもあるゆゑ、ちよつと行きつまります。けれどそれは皆さんの意見を伺ひ、世間一般の趣向なども考へた上で、また研究してみませう。

△白屈菜　　苦慮。
△罌粟　　眠。老耄。沃艶。
△菫菜　　忠實。愛。謙遜。
△黄スミレ　　舊友を忘れたり。
△遊蝶花　　我を思へ。戀人の回想。變らぬ心。
△白百合　　尊嚴。美。
△黄百合　　華美。虚誇。
△椿　　永續。
△玉つばき　　寂寥。永續。
△馬耳蘭　　幸福の歸來。
△花薔薇　　熱心。

△耬斗菜　　愚鈍。
△紫雲英　　頌德。變り易き愛。
△クロバーの葉　　共同。頌德。
△白クロバー　　我を思へ。
△紅クロバー　　勤勉。蘇生の喜び。

＝クロバーは俗に首蓿（ウマコヤシ）に當れども、ウマコヤシは黄花越年草にして邦產、クロバーは三四十年前輸入されたるものにて毬狀の紅或は白花をつける多年生草。和名オランダゲンゲ＝

△萩　　秋思。
△花えんじゆ（イヌマカシヤ）　　純愛。
△林檎の花　　最愛物。我が力。
△常春藤　　友愛。
△地錦　　寛量。大器。

旅さきの愛人へ、大豆と胡桃と松の葉を封じ送り『壯健（大豆）で歸る身（胡桃）を待つ（松）』といふ切なる思ひを傳へたとの傳說があります。前士耳古で解釋された花言葉といふも、先づこんなのではあるまいか。これでは植物の名からこじつけた一種の判じ物で趣味が薄く、文字無いからの苦しまぎれとしか思はれませぬ

後醍醐帝の中宮、新待賢門院は、さきの宮居の跡方もなく消え失せ、若草萌ゆる吉野の御陵に、一本の櫻

ばかりが昔の色そのまゝなのを見て當時を偲び玉ひ、躑躅低徊花の一枝二枝を玉章に卷き込み『みよしのは見しにもあらず荒れにけり、あだなる花はなほ殘れども』の一首を添へて、宗良親王へ送られたのは、日本に於ける花言葉及び贈花の最も古き記載だといひますがいかゞでせう。

△蒲公英、　託宣。輕薄。
△翁草　豫想。背信の戀。
△水仙の葉　予は戀に瘠せたり。
△仝花　予は幸福なり。
△スノードロップス（水仙の一種）　貞。希望。
△櫻花　愛。誠實。若年。
△雛菊　無邪氣。忍耐。平和。愛情のかはらぬ標。
△忍冬　節操。愛。歸依。
△蓮　信仰。純潔なる心情。
△瞿麥　慰藉。快活。
△牽牛花　虛飾。靜安。
△唐花草　希望。懷舊。
△野菊　障碍。天使。
△菊　貞操。愛。

△狗骨木　幸福の家庭。先見。保護。
△玉蜀黍　豐富。
△虎耳草　友情。
△鬼白草　戀の使。
△蛇いちご　母の愛。
△わらび　予は汝を信ず。
△牛蒡　懇願。
△小麥　富裕。
△蒔草　薄情。
△向日葵　卑陋。神を信ず。
△煙草　戀の奴隷。
△蓍草　健康。
△紫蘇　貧窮。
△紫陽花　變り易し。
△金盞花　怨羨。
△棕櫚　勝利。

これから趣味ある家庭通信には、ちよい〳〵花言葉を使つたら如何でせう。また卓上札上の花、床の花、瓶の花、婦人の髮を飾る花、襟を飾る花、乃至は一般の花束なども、多少此花言葉によつたならば、一入趣味多きことだらうと思ひます。

日本服の將來

深尾韶

(一)昔の日本服

世の中の總ての事がドシ／＼進歩し、發達して行く中に、獨り日本服の歷史は退化の歷史である。神武天皇即位の時代に於てすら、今の日本服よりはモ少し氣の利いた服裝であッたらしい。彼の支那風のユッタリとした上衣、袴、それに太刀を佩き、弓矢を携へたところ、如何にも雄々しく立派に見えて居る。然るに降ッて奈良朝時代になると、次第に華美と柔弱とを加へて來て、衣法のお袖のブーラシャラ、邪魔なものを附けたり、餘分な飾をしたりするのが善いとの樣になッて了ッた。武家時代になッて、武士の方面は多少その弊を避けたらしくも見えたけれど、因習は公卿や婦女子の上に執念くも殘存して、昔の簡單質素なる服裝はいづくともなく姿を隱して、情けなや、今の此の不シダラ千萬な日本服が、明治の代の白晝にそこらを横行することとなッた。

(二)いやな日本服

胸の開く、袂のブラ／＼する、裾の開ッ放しな、此の日本服は、何といふ厭な服裝でせう。働くには襷といふものを十字に綾取ッて袂を征伐せねばならず、歩くには足が突ッ掛ッて埒が明かず、風でも吹くと、婦人などは赤い面をして褄を押へながら──自然大路には足が擴がらぬから二三寸づゝチョコ／＼と忙がしく運びながら──歩かねばならない。股引を穿くと、裾がそれに搦み着いて糾れるし、雨の時には尻をクルリと捲り上げて、隨分不體裁極まる裝も爲なけばならない。腹の周圍には幾重となく布片を卷きつける。殊に婦人などは大きな帶、中くらゐの下〆、細長い帶留、と、それは／＼驚くばかりの夥だしい紐類を纏ひつける。これでは衛生も何もあッたものではない。身體の上にも、日常起居の便利上から言ッても、實に日本服くらゐ、不便にして體裁のわるいものは、東西兩洋を通じて有るまいと思ふ。

此く思ふのは吾々ばかりではない。少しく生活の愉

快といふことに意を致す者は、皆なドウにかせねばならぬと言ッて居る。然し日本服も亦多少外國人に賞用されて居るといふから、何故かと聞いて見たら、それは、一は寢卷として着心地が好いと言ふのと、一は婦人服の長い袖が甚だ優美に見えると言ふ二點である。なるほど、寢間着として多少特色はあらうけれど、亦夜中に知らずに居て腹が丸出しになッて了ふなど云ふ缺點もあるのだから、要するに歐米のものに比べて、別段よいと云ふ譯には行かぬ。それから長い袖の優美といふことだけれど、何も袂をブラ〳〵させねば優美でないといふ謂はれもない以上は、必ずしも日本婦人の服裝が勝ッて居るといふのでもない。

(三)外國の服裝

日本の服裝が惡るいと云ふと、其の反面に外國の服裝が善いといふ樣に聞こえるけれども、必ず然うばかりとは言はれぬ。西洋婦人の腰を〆付けて、蜂の樣にするコルセットは、啻に衛生の爲めに宜しくないばかりではなく、體裁とても餘り宜しいものではない。そ

して其又、大きな裾を御苦勞樣にも泥に引摺ッて恐る〳〵歩く樣は、誠に氣の毒に見える。男子の洋服とても、丁度蟬の體の樣に、腹の處に大きな空間が出來て居て、少し運動を劇しくしたり、身體を屈めたりすると、シャツなぞがタクシ上ッて、皮膚が外氣に觸れるなぞは、感心の出來た話ではない。殊に此頃のハイカラと來ては頸枷、胸枷の刑罰で、さらぬだに廻らぬ頸に、一層血の循環を惡るくするのだから、吾輩は大にそれに反對したいと思ふくらゐである。要するに歐米の服裝も、只一步日本より進んでゐるだけで、運動に便利なだけが取柄であらう。そこを思ふと、平素野蠻人の樣に思ッて馬鹿にして居る朝鮮人や支那人の服裝は餘程進步してゐる。比較的に袖の廣すぎるのが少し氣に喰はぬが、胸も腹も、彼の廣やかなフックリと出來た服、それに其の袴、特に其沓、流石は先進國の俤が殘ッてゐるではないか。吾々は大にそれに學ぶ所がなくてはならぬ。

(四)改良服

日本服の不完全なことは誰一人拒むものが無くなッた。そこで改良服といふものが現はれた。先づ其の第一着手として流行したのは婦人の袴である。次の改良が小兒服、其次が男子といふ順であらうが、當今の傾向としては、只一般に袴又は之に類した裳を用ひるといふのが、輿論らしい、此の袴を穿くといふことは、今の日本服を彌縫する爲めには、どうしても必要には違ひないが、さて愈よ改良するとしたらドウであらうか。洋の東西を問はず、女といふと兎角裾の廣い長い袴を着けるのが例であるが、これは一種の迷信を世人が持ッてゐるのだと思ふ。女がズボンの樣なものを穿くと不體裁だとか不都合だとか云ふのは、どうも迷信らしい。此點に於ても支那婦人の服裝は、餘程思ひ切ッたものである。服裝といふものが、實用を主として裝飾を第二とすべきものであるならば、吾輩は斷じて支那婦人の如きズボン制度を採用したいと思ふ。此ズボン制とても決して美を損ふものではない。今後女子改良服を議する者は、宜しく其の迷信を去ッて、此點に一考を費して貰ひたいものだ。

それから子供の服裝について一言したい。白粉を白

壁の樣に塗立て、在平糖の樣な大きな帶を、頸の上まで衝ッ立て、紐を用ふること十筋ばかり、小さき足に駒下駄を穿かせ、アンヨはお上手で、右左から手を曳いて行くお孃ちやまを見ると、眞に厭氣がさして來るそれに反して、歐米風の長い靴下、短かい着物は簡單でさッぱりして、あどけなくて可愛いくて、活潑で生々して、見るからが心地がよい。日本の改良服も大分之に模して來たのは、甚だ嬉しい現象である。

男も女も、壯年以上の者の服裝はトント議せられて居らず、僅に一部の人が考へて居るくらゐに止まるのは、甚だ殘念な次第である。日本人の因循で多病で元氣の無いのは、服裝に原因して居るのも少なくないことを思へば、社會の中堅たる是等男女の服裝も、決して等閑に附すべきではない。これに就いては吾輩も多少の考へはあるが、他日又折を得て、叱正を乞ふことゝしやう、

筆を擱くに臨み、特に婦人諸君にお勸め致します。此冬の寒さの幾分を減ずるために、[illegible]きなさい。そして、それがどれほどアナタ[illegible]か、又どれほど起居に便宜を與へる[illegible]

輕便 瓦斯の煮焼 德用

瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮焼用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十六分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用便利也

○工事費は前金拂は一割引とし又月賦拂にて約定す

○臺所竈、七輪、湯沸、風呂並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

尚各種式新器具は當社構内陳列所又は銀座陳列所さへ陳列縦覽に供居候御立寄御一覽被下度候



東京 神田 錦町

東京瓦斯株式會社

御半ゑり帶揚類

飯倉四ッ辻 飯倉支店 電話新橋一五七四番

赤坂表一丁目 赤坂支店 電話新橋二〇六八番

四谷大通り 四谷支店 電話番町五一〇番

牛込神樂坂 神樂坂支店 電話番町六三〇番

本郷一丁目角 本郷支店 電話下谷七二番

神田須田町 須田町支店 電話本局二〇七三番

銀座一丁目河岸通り

帝國貯蓄銀行

（電話新橋）八一六番 二八〇八番

兩國米澤町 米澤町支店 電話浪花二五九〇番

淺草吾妻橋通 吾妻橋支店 電話下谷七三番

南品川一丁目 品川支店 電話新橋一一三九番

横濱吉田町 横濱支店 電話横濱一三〇四番

日本橋坂本町 代理店 田中銀行 電話浪花二四〇番

謹賀新年

THE SIMPLE LIFE

佛國ワグナー氏著 中村嘉壽君譯

單純生活

定價三十錢 郵税六錢

複雜なる社會に處して單純なる生活を營み剛健なる氣象を以て浮華なる俗流と異味を説きたる世界有名の書にして最も我國今日の時弊に的中したる教訓を與ふるものなり新年の贈物、家庭の讀み物として最も適當の品なり

鈴鹿正一君譯

次郎のおてがみ

定價十八錢 郵税二錢

家庭の讀物として最も有益なるは此書なり西も東も頑是なき次郎が疾くも無意味なる人生の變化なきに倦きて更に人界以上の慰藉を得んとて苦悶中愛兒レックスの紹介と一軍人の說明により天來の妙光に打たれて救に入る處を眞に面白く書き良書なり

葛巻星淵君著

信仰餘賦 小星（ほし） 訂正再版 定價十八錢 郵税二錢

集むる所數十篇是れ信仰上の感想を新體詩及短歌に賦したる者家庭の讀物としてよき慰藉を與ふる最上の書なり

五來素川君譯

家庭小說 未だ見ぬ親 定價五十錢 郵税八錢

新春家庭の好讀物

書籍

左ノ三書御購讀ノ一冊ノ御注文ニハ特ニ郵稅ヲ當社負擔スベシ

東京毎日新聞記者木下尚江原著
帝國文科大學講師ロイド博士譯
英譯 良人の自白
第一冊 定價六十錢 郵稅四錢

尾崎紅葉原著
帝國文科大學講師ロイド博士譯
英譯 金色夜叉
第一冊 定價七十錢 郵稅四錢

德富芦花原著
鹽谷榮譯
英譯 不如歸
全一冊 定價六十錢 郵稅六錢

雜誌

名稱	發行日	定價	摘要
東京パック	一日 十五日	一冊十三錢 六冊前金七十五錢 十二冊前金一圓四十五錢	本誌は昨年中は毎月一回十五日發行にして十二頁十二錢の處一月一日より紙數十六頁に增加し定價も上記の通改正して毎月二回一日、十五日と改む
月刊 食道樂	一日	一冊十二錢 六冊前金七十錢 十二冊前金一圓卅五錢	一月元旦發行第二卷一號には年中重寶臺所暦の附錄あり
英學界	五日	一冊十錢 六冊前金五十五錢 十二冊前金一圓	一月元旦發行第四卷一號には「ABCかるた」の附錄あり新春無二のよいお友達です
手紙雜誌	十日	一冊十八錢 六冊前金一圓 十二冊前金一圓九十五錢 一月十日發行に限 定價卅錢	一月十日發行第三卷第一號には紙數を倍加し新趣向の頗る優美高尚なる封筒を附錄とせり

東京市麴町區有樂町三丁目一番地
有樂社發行

中付五

炬燵雑談　（彦）

△塀の上の柿△エスペラント語△男子中心の態度

◎冬の霜夜の四疊半の置炬燵、親しき友と遠慮なしの出鱈目ばなし。是れ我輩の樂天地、自由鄕、言葉づかひのゾンザイも、勝手氣儘の喋りちらしも、皆それゆゑと御見ゆるしを乞ふ。

◎前々號の家庭雜誌に『塀の上に差し出て居る柿の木に、赤く熟した旨そうな柿が生つて居るので、子供がそれを欲しがつて、長い竿を持つてソーッと叩き落しに行つた。處がそこに人が來かゝつたので、子供は慌てゝ竿を棄てゝ逃げて行つた』といふ話があつた。そしてそれに對する渚山君の評に『此のソーッと取りに行くといふ心持が殘念だ。子供心にも其の惡事たるを自覺して居る所が淺ましいではないか』とあつた。如何にも尤もな話で、我輩も渚山君と同じく、其の子供の無邪氣でないのを口惜しく思ふ。そして渚山君の又云うた如く、若し其の子供が極めて卒直に『オチさん僕この柿はしい、お呉れよ』と云ふ様であつたならば如何に愛らしき事であらうと思ふ。

◎然し今の世の子供の心を此の樣にサモしくしたのは何が其の原因であるかと云ふに、我輩は決して親の仕付が惡いからとは思はぬ。我輩は彼の柿の木を圍うて居る『塀』が惡いと思ふ。『塀』といふものは、只だ默つて立つて居るけれど、實は『是より內に入る可らず』『此の內の物は我が所有なり、決して他人の取るを許さず』と叫びながら、兩臂を突張つて居る樣なものである。即ち塀は所有權の主張であつて、又私有財產の保護である。一方に此の私有財產とか、所有權とか云ふものがあればこそ、一方に之を盜むと云ふ事が出來るのである。塀を以て嚴重に柿の木を圍ふからこそ、竹竿を持つてソーッと之を叩き落しに行くのである。此の柿を取る者即ち此の所有權を犯す者は罰すると云ふ法律があるからこそ、子供は人の來るを見て逃げだすのである。そこで我輩は　子供のサモしい心を責めるよりも、先づ此の所有權といふものを無くしたい。子供の

盜みを止めさせようとするよりも、先づ此の塀を取りのけたい。塀を取りのけて、所有權といふものを無くして、總て世の中の財產を共有にしたならば、子供は必ず皆な無邪氣な心になつて、通りかゝりの餘所の叔父さんを呼びとめて、「ヲヂさん、僕この柿ほしい、取つてお吳れよ」と何の遠慮もなく甘えるであらう。ナント諸君、一日も早く其の樣な世の中にしたいではありませぬか。

◎我輩は此頃エスペラント語といふものを稽古しかけて居る。此のエスペラント語といふのは、早く云へば世界語で、世界中の人が皆な同じ言葉を使ふ樣に仕樣といふ處から始まつたものです。

◎全體、同じ人間の兄弟同胞でありながら、イギリスだの、フランスだの、ドイツだの、ロシアだの、支那だの、日本だのと、小さな領地に塀を建てめぐらせて銘々勝手な國自慢をして、イヤ己れが强い、イヤ己れがエライと、いがみあひばかり仕て居るのは、隨分馬鹿げた話ぢやありませんか。尤もお互に野蠻の昔には

山一つ隔てゝも、海一つ隔てゝも、滅多に往來が出來ぬといふ有樣であつたので、據どころなく別々に生活して居たのだが、今では滊車あり、滊船あり、電信あり、電話ある世の中、世界中の人が申合はせて、何でも一緒にやつて行かねばならぬ譯。それに就て第一困るは言葉の不自由、仕方がないからお互に外國語を稽古して、それで用を足して居るが、その外國語の爲に無駄な力を費すことが何程か知れぬ。そこで先の見えた人達が、これは何でも世界語を拵へて、世界中の人が皆一つ言葉を使ふ樣にせねばならぬと考へついた。

◎それから世界語の研究が始まつて、色々學者の苦心を重ねた揚句、今日ではエスペラントといふのが盛んに行はれる事になつた。扨そのエスペラントの組立を聞くに、ヨーロッパの諸國語の中から最も便利な語根を取つて、其の綴方、發音、文法上の變化等を新に一定して、極めて簡單なる、極めて正確なる、極めて規則立ちたる言葉にしたのである。それで若し此のエスペラントが廣く行はれて、外國人との交際には一切之

を使ふと云ふ事になれば、何國の人でも、皆な自國語の外にエスペラントを一つ學んで置けば、世界中どこに行つても差支が無いと云ふ事になる。殊に之を日本人の地位より見れば、英語だの、佛語だの、獨逸語だのと、そんな區々たる地方語を學ぶ必要は無くなつて何人も只だエスペラントだけ學べば善い事になる。それから更に一歩を進めて、其の謂はゆる自國語なるものが消滅する時には、世界中、只だ此のエスペラント語あるのみで、人は皆な自然に此の世界語（即ち人類語）を覺えるの外、語學といふもの丶爲に力を費す事は無くなつてしまふであらう。

◎然るに、世には隨分近眼の分らず屋が澤山で、是ほと明かな道理に反對して、猶ほ強いて其の國語の特色を（如何に不便でも、如何に不利益でも）保存しようとする者がある。獨逸の保守黨がアノ、一種奇妙な字体を維持しようと勉め、日本の頑固連が漢字や古文法を後生大事と守つて居るのは、即ちそれである。然し、そんな分らず屋も死んだ跡まで自分の意地を通す事は出來ぬから、遠からず保守論は此の社會から一掃せられて、世界の大勢が滔々として到る處に漲るであらう。

◎されば日本に於ては、漢字節減より假名文字流行となり、更に進んで羅馬字採用となり、それで先々字体ばかりは世界共通となり、それと同時に英語の普及となり、最後に進んでエスペラントの採用となるであらう。そこで我々は今日より、成るべく此の勢ひを助ける爲に、早く漢字の節減を行ひ、早く羅馬字の使用に慣れ、一層進んでは（既にヨーロッパ語の素養ある者は）早くエスペラントの研究に志すべきであると思ふ。

◎それで若し此のエスペラントを學びたいと思ふ方あらば、岡山市のエドワード、ガントレット氏（Mr. Edward Gauntlett.）に御問合せあれ。氏は今月初旬よりエスペラントの通信教授を開いて居ます。小生が稽古して居ると云ふのも、即ち此の通信教授を受けて居るのです、尤も、此の通信教授は英語の素養ある者に限るので、三ケ月で一應の卒業となるのです。其中、

稽古が少し進みましたら、又何ぞ其の御話を致しませう。

◎女子教育に就て、謂はゆる良妻賢母主義と、高等教育を必要とする主義との二つがある。良妻賢母主義とは、女子は人の妻となり、母となるのが其の本分であるから、それを目的として教育せねばならぬと云ふので、御無事なる教育論者の大抵はそれである。然るに是に反對の議論がチョイ〳〵見える、桑木嚴翼君の如きは『賢母良妻主義必ずしも惡くはないが、其裏面には女子の人格を卑下して、昔風の三從七去主義を含蓄して居る』と云ひ、又『或人は家庭を以て、夫たり父たる人の慰藉娛樂の場所と考へて居るが、併しそれは解釋次第では、甚だしい我儘な、人格を無視した事と云はねばならぬ』と云ひ、而して女子に高等教育の必要なることを主張して居る。又浮田和民君は『人には男子としての天職、女子としての天職の外に、個人としての天職がある。女子の天職は子を產み子を育てるに在るが、個人の天職は性を超えたる所に在る。女子を

家庭にのみ押込めるといふ主義は、女子の天職のみを知つて、個人としての天職を無視したのである』と云つて、同じく女子に高等教育の必要なることを主張して居る。是等は最も進步した意見である。

◎然し、此の二君もまだ十分に男子中心の態度を脱して居らぬ。即ち桑木君は『夫や子の事業に對し、智力的に同情し得る程度には、是非教育の度を進めなければならぬ』と云ひ、浮田君は『といつて、女子も人である、男子と同じく世界に濶步すべきである、育兒か、料理か、それは男子も同じく責任があるなど丶、全く女子の天職を無視してはならぬ』と云つて居る。育兒は假に別問題としても、何故に料理が是非とも女子の責任であるか。又女子の智力は何故に夫や子に同情し得る程度に止まらねばならぬか。學者の說としては餘りに筋が立たなさすぎる。



家庭教育の秘訣　（韶）

世には、家庭教育といふことの眞義を知らず、只漫然消極の主義をとり、威壓を以て兒童に臨む父母もあれば、子供可愛さに吾知らず犬馬の愛に陷ゐッて、手も付けられぬ我儘の子を養成して了ふ父母もある。これらの子供が行末どんな人間になつて世を渡るかと、考へて見ると實に空おそろしさに身顫がする。彼の幾萬の犯罪人、その多くは家庭の教育を誤つた者であることを見ても、家庭教育が如何に愼まなければならないかがわかる。吾輩は世の父たり母たる人々に向つて、兒童心理學、教育學、生理學の三つを修めぬ者は、未だ親たるの資格なきことを告げたいのであるが、その前に左の一話に耳を傾けられんことを希望する。これは女子大學の櫻楓會員たる奥宮かず子氏が、少年寮と名くる兒童寄宿舍を經營された、その經驗談である。

▲家の組織、規則につきまして、種々やつて見ました……が、つまり自由に任せた方が餘程結果が善さそうです……

▲又、子供の事ですから、種々危險な遊がしたう御座います。强てそれを抑へると他へ行つてする樣な恐れがありますから、どの樣な事でも私の前でならばしても宜い。其代り私の居らない時には決してしない樣に致してをりますが、之も皆よく守つて居ります。

▲私の家は全く子供に自分のものと思はて居りますから、庭なども子供に任せて思ふ樣手入をさせて居ります……小さき家庭に相應の自然教育をなして居りまして、牧畜も、園藝も、子供の趣味に應じてして居ります……（家庭週報第四十一號）

すべての場合に於けると同樣に、『自由』と『同情』とは、家庭教育に於ても亦甚だ緊要切實なる秘訣であります。奥宮女史が早く此點を觀破して、適切な措置をなされた事は、十分の尊敬に値すると思ひます。命令、禁止、甘やかし、放埒などを家庭教育の別名の如くに心得、而して吾子の始末に困つて居られる人があるならば、此女史の眞摯なる教訓に學びて、速に兒童の取扱法を改革しなければならぬ。『一寸の虫にも五分の魂』『三つ兒の魂百まで』の諺を知れる人々は、我子も亦一の人格を備ふるものたることを考へ、相當なる尊敬を以て其の兒童に接せねばならぬ。此くして家庭教育難の歎聲は直ちに除き去られるでありませう。

老父母を迎ふる記

浩山生

眞に老いたる父母である。父親が今年丙て八十歳、母親は丁度その一廻り下、私は實に父の五十二歳の時の子で、四人姉弟の中の一番末子である。昔から末子と云へば、始めから親が算盤勘定の内に入れなかつたものであるらしいが、今日の有樣を考へると、一面不可思議な感じがせぬでもない。されば、故鄕の人はこの事を「石が流れて木葉が沈む。」と呼び、「誰に厄介にならぬとも限らぬ。」と挨拶したと云ふ。但し、私に於ては、彼等が想像する程立派な人間になつたのではない。老父母を迎へて充分の慰安と滿足とを與へる丈の金錢もなければ、またその修養も人格もない。正直に白狀すれば、止むを得ぬのであつた。住むべき家がなくなつたからである。

姉二人あれど他家に嫁ぎて子供の三四人もあり、本來ならば一人の兄が一發奮して、傾いた家を曲み乍らにも支へる工夫をせねばならぬのであつたが、悲しむべ

し、彼には少しくその荷が重過ぎた。彼には通例人の能力さへも缺けて居る。小學校の先生が出來ず、商賣の道を知らず、驛夫が勤まらず、活版所の手傳ひをする小才もない。若し月給取りになつたとすれば、その俸給以上の金子を、給料日以前につまらなく消費して居たであらう。彼は今内職をして居るが、それに依て得るところの金はほんの小使にも足らぬのである。嫁をあてがへば女に道樂はせぬだらうと云ふ考へで、今から十二三年も前に、兩親が所謂嫁を貰つて遣つたのが、今の私の義姉であるが、俗に似たもの夫婦とやら、これも左程に秀拔けて居らぬ。其内に子供が二人迄出來て、生活費はます〳〵嵩む、それにも係らず、夫婦は依然として金をもうける術を知らぬのである。

萬事右の次第故、老父母は殆んど此高年になる迄、痩世帶を持續けて、忰夫婦と孫二人の飯米から衣類の費用、病氣の節の藥禮迄工面して遣つて居た。世帶を渡すのが惜しいのではない。案じられるから渡さぬのであつた。斯くの如くして、家内六名が別に大した收

人の道があるでもなく、さればとて、幼き頃より慣された武士の氣象は流石に捨て難く、矢張相當の體裁を作つて、高楊子を極めて居る內、次第に借財などが殖えて、加ふるに兄嫁の發狂、入費は非常な金高となり、兩親の內職や、僅かなる私の補助金位では、到底持切れぬ始末とはなつた。

これより先、兩親は豫てより早く身を世帶持と云ふ苦境から離れて、安樂の地に餘生を送りたいと云ふ念願であつたが、未熟の兄に未練が殘り、危い處で、つく／＼大斷行の機會を逸して居た。兎角する內に、段々と根本の腐れは廻つて來て、其家を賣らねば仕方の付かぬ事となつた。終に家を賣つた。そして借金を皆濟した。兄には別に家を借り與へ、幾何かの金子と、充分の家具器財とを渡し、「これからはお前が家持だよ夫婦共稼ぎて、生活の道を立てなさい。」と云ふ言葉を殘して、こゝに兩親は私のところへ移つて來た。思へば父母が此計畫をしてから三年の餘にもなる。そして今度始めて實行が出來た譯だ。

愈々上京と云ふ事になつて、伊賀の姑、其他方々の親戚と訣別を告げ、汽車の上二十時間近くの旅路平らかに、新橋停車場に着いたのは、去る十一月の廿六日であつた。此日は朝まだき曇天の寒い空合、私等兩名は二三日前からいろ／＼準備して、俄に釜と竈を買ふ。一升以上を容るゝお櫃を新調する、と云ふ騷ぎ。不揃乍ら、一通りの用意はもう出來て居る。私は黑田の甥兄弟に聲援されて、新橋に行くと、丁度其頃は遠征軍人がそろ／＼着京し始めた時分で、構內は一方ならぬ混雜であつた。老人は屹度一番の後であらうと思ひ思ひ見て居ると、果して、最後の旅客から二三間離れたあたりに、拙い田舍風の服裝をした、色艶の惡い年寄が二人、木綿風呂敷の包三つに、信玄袋、蝙蝠傘、黑い毛糸の肩掛など澤山な持物、「お早く願ひますよ。」と云ふ驛夫の聲に追はれて、「はい／＼」と足弱車を慌てゝ早めるのであつた。私がこの二個の人影の近附て來たのを見ると、嬉しい、懷しいと云ふ感情よりは、氣の毒に、憫然なと云ふ思ひの方が先きに私の胸に宿

つた。
併し、私は思はず走り入て、重さうな其荷物を引取つた。それと齊しく、母は先づ私の顔に目を付けて、
「お丶惠治郎かへ。よう來て吳れた。」
父上は私である事が急には解らなかつたらしい。母の言葉を聞傳へて、
「え、惠治郎――お丶、來て吳れたか。」
其嬉しさは千萬無量であつたゞらう。切符を渡して開札口を出ると、待受けて居た二人の孫は、「お祖父様お祖母様。此處です。」と云つて、荷物を受取り乍ら、これも何とやら落付かぬ色がある。私等は二人を取敢へず三等の待合室に案内して、暫時休憩する事にした。見ると、父は私が子供の時に見て記臆して居る黃八丈の着物に、紋なしの黑の紬の羽織を着て居るし、母の方は昔物の伊勢崎に鼠色の小紋羽織、これも慥に見覺えのある品だ。誰でも、新橋を下る長途の旅客を注意して迎へる人は知つて居やう。睡眠の不足と、旅の疲れとで血色惡く、花のやうな美しき人でさへ、一段見

劣りのするものである。今私は三百哩近くも一息に乘つて來た二人の老人を迎へて居る。其顔色、其眼色、其身裝、それは容易に何人にも想像が出來るであらう。
休息所では萬事落付かぬ。周圍が騷々しく、當人の心もまだ全く常に復らぬので、固より心底から深い感情の起らう筈はない。軈て、手荷物は後よりとして、折からの凱旋門を屈つて銀座に出で、二十分斗りの内に靑山行の電車に乘る事が出來た。兩親と私とは左側、甥二人は右側に陣取り、漸く落付いたと思ふ頃、母は膝の上の信玄袋をこそつかせて居たが、急に田舍の蒸菓子を入れた竹の皮包を取出して、
「さあ、道行、おあがり、何か食べたいだらう。」
この孫は今年十九である。けれど、母の目には依然として四五年前の道行だ。彼は乘合の人の前を兼ねて、それかと云つて、好きお祖母さんの好意を謝絶することもしかねて、もぢ〳〵して居る。私は場合を察して、
「お母さん、後になさい。道行はもう大人ですから。」
「お丶、さうか〳〵。」

始めて氣付たやうに、こそ〳〵とまた以前の信玄袋に皮包を收めた。

「大變旨さうな菓子ですねえ。家に着いてからゆつくり皆が頂きませう。」

母親はほく〳〵と喜んで居たらしい。

電車を下りて家に着いたのは、彼是十時半頃であつた。座敷は淸らかに片付けられ、座敷團の有丈が布いてある。私等三人と、それから留守中午餐の準備に忙しかつた私の妻とは、改めて挨拶をした。

「綺麗な家だなあ。壽命か延びるわ。」

父親は座敷から、玄關、茶の間、椽側、庭、それに天井、疊など迄じろ〳〵眺めて、嫣然して居る。只の三室の借家乍ら、成程幾百年來燻べに燻べた故郷の家に比べては、柱の白い丈でも心地がよいかも知れぬ。

「道具類も澤山殖えて。」

蓋し、母は一昨年一度此家に來た事があるからである。

頓て、姪も來た。姪の子供も來た。兩親には曾孫に

當るのである。其次には二人の甥に代つて、彼等の母親、即ち私の姉も來た。十二時になつて、手料理の膳司が出た。吸物もある。蒸菓子と密柑が美しく顯はれる。親、子、孫、曾孫、これが一室に集つて、且つ食ひ、且つ談じ、且つ笑ふのであるから、霜の原宿も爲に時ならぬ花を咲かせた。

其夜も矢張一族のものが殘らず集つた。其翌日も又集つた。畢竟、物語のある間は彼に行き、此に來たり、愛情と懷しさとに飢えたる胸を癒やしたのである。其内に、父親の顏は漸く昔の父親の顏らしくなつて來るし、母親の姿もまた小供の時に覺えた姿らしく見えて來た。私は十六の時分から故園を離れて居るので、十二三年の長き間、兩親と食事を共にした事は少ないのである。今や私の家には新しき家族が二人殖えた。

「お小さいの〻代りに、御老人が殖えましたねえ。」

と云ふ人がある。併し、老人にはまた老人の趣味があるのみならず、若々しい、美しい人の面影から、私等が常に一種の美念を感ずるやうに、其汚れた皺だらけ

の顔の間から、幾多の尊貴な敎訓を感得する事も出來るのである。斯くて、日の經る毎に親しみは自然と加り、愛情の交麗らかに、意思は疏通し、家內四名、男は女に、女は男に、姑は嫁に、嫁は舅に、何等の隔ても遠慮もない。隔てと遠慮があるならば、それは上帝が要め玉ふ謙讓の心の發作であらう。若しそれ夕の灯、輝いて食卓の上を照らす時、私等は心から神の鴻恩に思はず感謝するのである。些の爭ひなく、些の妬みなく、些の恨みも僞もない。大兵の父が禿げし頭を光らせて、がつしりと座つた傍に、母の所謂「笠を被つたやうな」束髮の妻が、白いエープロンを着けて、食を共にし乍ら、食卓の事を司つて居る。腰あたり迄の半纏を着た母親は、其右に在つて、嫁の助手となり、かにかくの世話に骨を惜まぬ。其間は私は無限の幸福と趣味をば覺えつゝ、箸を採る心地、得も云はれず樂しいのである。

　私は最初、此家に一室增築をするやうに、家主に相談しやうかと思つて居たが、此考へは間なしに全く消

滅して了つた。假令私は充分の財產があらうとも、父母の望みでない以上は別居はせぬ積り。私のこの生活には金錢はいらぬ。只同情と謙讓さへあれば、永久に萎む事なく美しい花が咲いて行くであらう。

　部屋の割宛は、私が座敷、妻が茶の間、それから玄關の三疊敷が父の部屋である、初めの計畫では、矢張茶の間の一角を其部屋に推薦する事にしてあつたのを父親は餘程玄關が氣に入つたと見えて、斷手として動かない。通運便の荷物が到着すると、直ぐに其內から自分の小箪笥を取出して、玄關の一隅に据付け、木刀と、手鞄と、茶の道具（父は甘いもの好きで、羊羹に迄砂糖を掛けると云ふ方）それに內職の道具一切を持運んでちやんと濟して居るのである。此上は私等が何を反對する必要を見やう。三疊の玄關には眞に一人の老書生が出來た譯だ。只一つ可笑しいのは、私が曾て壁の一方に掛けて置いた、サホー（トオデーの小說サホー中の女主人公の淸姿）の新しい額面が、服裝かまわぬ怒肩の古武士と相對座して居る事で、このコント

ラスト丈は、滅多に他で見られぬ圖であらうと思つて居る。母親は先づ遊軍と云ふ方で、臺所を手傳つたり、掃除をしたり、仕事のある時は座敷に行つたり、茶の間へ來たりして明るい日影を追廻して居るが、夜などは矢張玄關に父と火鉢を圍んで、自由に寛ぎ、折々茶の間へ遊びに來ると云ふ風である。

尙ほこの新しい生活に就ては、種々感ずる事、發見する點が澤山あるが、それは追々に發表する事にしやう。兎に角、嫁と姑と云ふ世間での大問題も、我家には爪の垢程も價値のない問題であると云ふ事丈を、こゝに一寸告白して置く。

△渚川君から此の原稿を受取つた日、晝飯後の食卓の上で深尾君が此の文を朗讀した。予等四五人は周圍からそれをのぞきながら聞いて居た。聞いて居る中に、予の胸は怪しくも迫つて來た。新橋の停車塲の所まで聞くと、予の目は既に淚に濕うた。それよりいよ〳〵進む中に、予は人目耻かしきばかりに泣かされた。他の人々も深き感に打たれて居た。嗚呼この率直なる眞情の文を見て、動かされぬ者が何處にあらうぞ。予も亦た曾て久しく老親二人を奉じて大阪に落魄し、母を失ひて後、七十歳の父を伴ひて、身すぼらしくも新橋の停車塲に着いた事があるのだ。予は温良なる渚川君が些の不平の氣

を示さずして、滿足と感謝とを以て此の文を草したのを見て、今更に深く君の人と爲りに服せざるを得ぬ。而して予は又此の喜ばしき文字を以て新年の「家庭雜誌」を飾るを得た事を、大いなる誇とする者である。（堺生）

北海道の冬の生活（貂）

初雪！初雪！時夜來はや二寸ほど積り申候、只今午前十一時、華氏寒暖計室內にて四十一度、あゝ奇觀！生れて初めて見る吹雪、今しきりに御座候。明日より煖爐を用ふる積り。（十月廿三日）

＊　＊　＊　＊　＊

前便に申上げたる初雪は、廿五日の晴天にて、日陰の外、大抵消え去り申候。初の雪雨三回は此く消えて次からのが寢雪となる例の由。北海道とて聞きしほど寒くもなし。此頃は雪どけにて、道のわるきこと甚だしく、小學生徒などは、四五町に過ぎざる道を儉約する爲め、わざ〳〵學校の前の他家へ下宿したるものさへある始末に候。それさへ尚ほ足袋はだしか草鞋ばきにて登校する有樣ゆゑ、遠路の者は途中にてキット一二度は辷り轉び、人間の餡ころを製造致して參ることに御座候。

婦人のショールと申せば、甚だ贅澤の樣に聞こえ候

へども、北海道にては、これとお高祖頭巾とにて吹雪を防ぐ外、方法これなく候。男子は皆二重廻しか外套を用ひ、下は股引やら毛布類やらにて寒を防ぎ申候。婦人は股引の代りに大抵美くしき筒の如き『脚半』を穿き居り候。勞働服としては、男女ともタッツケ袴の如き『モンペ』を穿き申候。熊公も八公も、お多福もスベタも、猫も杓子も、一時に紳士貴婦人となりすます北海道の冬こそ、面白き景色には候はずや。（十月三十一日）

＊　＊　＊　＊　＊

今度はチト當地の寒氣の一斑を申上げん。昨日夕方近所より牡丹餅を貰ひ、食ひ殘せしを、今朝、朝飯前に食はんとして取出したるに、無慘や重箱の儘に氷りたり。火鉢の上に翳すこと五分間にして漸く重箱を離れたれば、金網に載せて燒きたれど、上側ばかり焦げて心は氷のまゝなるには避易致し候。獨身生活の無性にも、昨夜炊ツぱなしにせし飯鍋の蓋も、火にかざして漸く取りたれど、中は水晶の削り粉を着けたるが如くキラ〳〵と輝きて、シャモジを立つべくもあらず。據

ゐなく叉金網の上にて炙りたるが、飯の味は全く失はれて宛からソバカスにても食ふが如き心地いたし候。今朝寒暖計華氏十七度、朝飯前、廊下に水を撒きて一面の氷となりし上を、雪踏などにて辷るは實に面白し。生も練習の結果二間位ゐは辷れる樣に相成り申候。雪ふり止みし隙々には、男の子たち辷下駄にて道路、河川など、多少雪の固き上を縱横無盡に走する樣、勇ましく面白く候へども、生の如きは轉んでばかり居申候一昨日は晴天なりしより、子供の小さき橇にて屋根棟より庭へ辷り下りて遊び申候。此頃は毎朝、顔を洗ひ居る間に、はや揚子は銀箔を被せたるか如く、面を拭へば手拭は直ちに板の如く相成申候。硯は例の如く熱湯を入れて墨をする。流元氷りて水流れず。

曉方フト顔の冷やかなるに目覺むれば、夜具の襟はわが呼吸にて五六寸の間、眞白に霜を置き申候。此分にては嘸氷や厚からんと存じ、忘れて入れおきし柄杓を手桶より取上げおかんとせしに、もはや厚氷に鎖され居て柄は脆くも折れ申候。夜明けて後、幾度か熱湯

を注ぎて檢すれば、水の少なかりし方の手桶は、底まで一尺ばかりの厚さ皆氷り居しにて候。鼻の孔何とやらヘンテコなりと思ひしに、中の毛と毛とが氷りつくにて候ひき。

英語を習ふとて、ペンを使ふに、紙上のインキ乾かずに氷り、小々溫むれば溶けてニジミ出で申候。殊に今朝起きて見れば、机の上のインキ瓶メチャ〳〵に毀れ居たりしには弱入り候。然し中身は氷と化し居りしため机上の書類を汚すこと少なかりしは、思はぬ仕合に候ひき。此手紙を書くにも、少々筆を休め居れば直に氷りて錐の如くなり申候。そを溫めんとて火の上に翳し、今も過つて穗先を焦がし、新らしきに換へ申候

（十二月二十四日）

＊　＊　＊　＊　＊　＊

當地の雪はハヤ六尺以上一丈くらゐになり、家の裏は屋根の中腹と庭の面と平らになり申候。六尺ほどの氷柱は初めて見る所に候。二日ばかり御無沙汰せし勘定を果さんとて、今朝雪隱に入りしに、驚くべし大便の山がヒマラヤの峰よりも高く踏板に上に突出で、而

もカン〳〵に固く氷ッてゐる始末に、據ろなく大きなる薪を持ち行きてナグり付け、漸くにして便を足し申候。御一笑下されたく候。それも其筈、寒暖計を見れば華氏零度以下十五度に御座候。上川高原などにては更にこれよりも十度位ゐは降れるならんと存じ候。此頃は馬橇の通行あまり多からざれど、三四月頃に至り日中少しく暖氣を催ほして、積雪の上面が少しく溶け其夜の嚴寒に更にそれが堅氷と化して、馬蹄も穿つ能はざる程となれば、夜の明けぬ中より鈴の音勇ましく絡繹として疾風の如く馳せ違ふ馬橇眞に織るが如き賑ひを呈する由に候。その時その橇に帆を掛けなば更に速力を加ふるならんとは或人の戯言に候へども、鏡の如き氷原が、如何に氷走に適するかを極めて巧に形容し得たるものと存じ候。(二月十一日)

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

二日の御書面うれしく拜見いたし候。殊に在中の櫻桃、木華、京菜、蠶豆等の花の御心ゆき、大に當地の無聊を破り申候。近所の人々に見せたるに、モウ咲ましたかねえと皆々驚き申候。當地雪は最早三尺に減じ、數日前の初雨に雨垂れの所など地面の見え出せしもこれあり候。何處も此頃は雪どけのため河水汎濫致し閉

口に候。さしも厚かりし石狩川の氷も溶けて流れて、再び渡船となりたれど、數日來流氷の爲め交通殆んど杜絶の姿に御座候。

本日熊の肉到來、食ッて見たら中々うまい物にて候ひき。これは二三日前ツイ近所の山にて獲たるものゝ由に候。欵冬のとう稍や大きく、柳芽ぐみ申候。

先日、フンドシ用として晒木綿六尺購求いたし候處どうもヘンに短かくて〆にくかりし故、よく〳〵聞きし所、これはシタリ、北海道にては呉服物まで一切曲尺のみ用ひ候由。オヤ〳〵に候はずや。(四月八日)

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

陽氣は爭はれぬもの。滿目只皚々たりし北海道も、頃日はアイヌ芋、時知らずなど、優しき草花の幾種、しほらしく咲き出で、雪は概ね消え去り申候。本日の如きは華氏寒暖計既に七十三度を示し候故、今迄の胴着、股引、綿入羽織を脱ぎすてゝ、俄かにシャツと綿入のみになり、身輕く心地よく覺え申候。鶯、鶺鴒など來りて時々は憂さを慰めくれ申候。隣りの子供、あすは山櫻の花を採ッて來て上げませうと云ふ。げに漸く春は茲に廻り來り申候。あゝ長き冬にて候ひしことよ。(五月十五日)

客を早く歸らせる法

新聞記者が或る有名な政治家を訪問して「先生のお宅には來客が澤山で嘸おうるさい事でせう」といへば、政治家之に答へて「ウム、一日平均四十人くらゐ來られ、そして其中で二十人位にやア會はなきやならないから」「成程、それぢやア堪りませんな、して其の大勢の客 の話を、先生はドウして早くお切りあげなさるのです、先方の氣を惡くしない樣にして、そして早く歸らせようといふのは隨分六かしいですな」「そこは我等にウマイ策があるのだ、モウ大がい時刻になると、玄關の書生が此の部屋に來て「奥さんがチロット先生に御用がある」と仰います」といふのだ」「イヤなあるほど、ヘツヘツヘ、、、、こいつはウマイ」といふ時、書生がスウツとはいつて來て「奥さんがチロット先生に御用があると仰います」（「英學生」より借用）

新年料理の一節

割烹學校創立者 石井泰次郎（投）

椀 梅田午蒡、牛みそかけ

▲午蒡（直徑三寸位 厚さ六分）七つ▲鰹だし一合五勺▲醬油二勺▲味淋二勺▲牛肉一斤▲かつをにだし六勺▲醬油（こき品）二勺▲味淋酒（白）二勺▲柚子少々

右の拵方

午蒡（梅田午蒡を用ふ）を洗て、輪切に切て、湯鍋に入れ、だし（一合五勺）醬油（二勺）みりん（二勺五才）を加へて十五分間煮て、取あげおくべし。牛肉は、肉挽きかいにて、（まづ小さく四角に、筋を挾間に切るやうに切りおきて）挽つぶして鍋に調味料を入れ、炭火にかけて、右のひき肉を入れ、箸にてかきまわしながら、五分間煮るべし。右の午蒡と牛そぼろの拵へたるを、椀にもりやう、及び汁の割合左の如し。

▲かつを煎汁六合▲醬油（こき品）二勺四才▲味淋酒（煮切）二勺▲食鹽一匁

鍋にかつをだしを入れて、炭火にかけて煮立て、醬油を入れ、其まゝおき次に煮切を入れ、次に鹽を加へて、味をこゝろむべし。この味は常の椀の汁よりもあまし。これは、牛蒡も牛そぼろも下煮したればなり）るて、前の午蒡を一つ、椀の中に盛りて、汁を入れ、上よりそぼろをかけて柚子一へぎをそへて、蓋をして出すべし。

入社の御挨拶

深尾韶

ある日、堺さんが私に仰しやるには『ウチの雑誌も、いよ／＼發展の時機が到來したと思ふ。キミもドウセ何か爲やうとして居るなら、ウチへ來てやッてはドウだ』と、私、内心で躍り立つほど嬉しかッた。けれど自分に果して夫が出來るだらうかと思ッて見ると甚だ心細い、それで少し躊ッて居ると、堺さんは『一體キミは、そうなる方が希望なのか、それとも………』といふ重ねての問、私は情を矯るほどの有邪氣な眞似が出來なかッたので、つい『それは、ボクは無邪氣な子供と婦人くらゐ好なものはない。筆を持つ職業なら、その方面の雑誌をやッて見たいと、先から望んで居たのです』と答へて了ふと『あアそんなら丁度好い』といふので、そのまゝ協議が纏まッて、雑誌が擴がる、私が入るといふ事になッたのです。

私は、これから由分社の一員となります。堺さん西

村さんは、自分の爲にドンナに好い先生で且つ兄さんでせう。堺爲子さん堀保子さんは又ドンナに好いおッ母さんで且つ姉さんでせう。内には此の親切な指導者があり、外には讀者諸君といふ懐かしい友が群がつてゐる。私の前途は實に光に滿ちて居るのです。

私は、これから本誌編輯の事務―字數行數の計算、原稿の整理などからソロ／＼と色々な事を敎へて戴くのです。私は諸君、諸先輩の指導の下に、此くするとの出來るのを、身に餘る喜悦と感ずるのでありますが、只こゝに一つ心配なとは、私が夫にたづさはつた爲めに、少しでも、此の最愛なる家庭雑誌の品格を傷けはせぬかといふとです。私は此點に於て大に自己を鞭撻する積りでありますが、どうぞ諸君も新たに厄介な親類が一軒出來たと思召し、大小萬端、お心付け下さるやう、偏へに願ひ上げます。

それにつけては、一應身の上をお話し致して置くのが至當と存じます。私は明治十三年に靜岡市で生れ、本年三月まで凡そ八箇年ばかり、郷國と北海道とで小

學校敎員を勤め、其間に子供の可愛さをシミ〴〵敎育せられました。今でも時々は、フイと敎へた子供の上を思ひ出し、心を遠い彼方に走らせて、ボンヤリすることがあります。郷里には、兩親も小さい弟妹も居りますけれど、東京に來てからは、堺さんの處にも子供が居ないので、ホントに寂しくッて仕方がありません。靜岡に預けてある眞アちやんでも歸ッて來たらドンナに好いだらうと思ひます。讀者諸君のおウチには、定めし可愛いお子さん方が澤山に居らッしやるとでせう。切めては誌上で私が其お友達となッて、樂しく共に語ることをお許し下さい。

御挨拶やら、お願ひやら、先はザットかくの通り。

敎師「太郞さん、あなたの作文が皆の中で一番いけない。お父樣にそう言ッてやりますよ。」

太郞「言ッてやッたッて怖かアないや。それは、お父樣が作ッて吳れたんだもの。」

大山日和、痛快堂　（[illegible]）

（一）

東郷坂、東郷ネクタイ、東郷日和など丶、功勞のあつた人を紀念するも穴がち惡くはないかも知れぬが、或新聞が大山大將の歸京の日に、「今日こそは又大山日和で」など丶書き立て丶居たのに、當日は早朝からの雨とはおかしいぢやないか。オベッカも大抵にするがい丶。僕の家なんどでは、此頃雨さへ降れば、「今日は又大山日和だね」「大山日和とは實に閉口する」など丶云ふ事がはやつて居る。何も大山サンに對して惡意のある譯ぢやないが、世間のオベッカりが癪にさわるから、ツイこんな事も云つて見たくなるのだ。

（二）

二三日前、深尾君と一緒に近處を散歩して居たら、突然深尾君が「是りやアうまい」と云ふ、「何だ、何だ」と僕が問ふと、ツイ向ふの家の前の小さな看板を指ざす。見ると「諸病名灸、痛快堂」と書いてある。なあるほど、灸するに痛快堂は實にウマイ。

婦人新論

堺利彦

（二六新聞所載の中より摘録）

◎近親結婚の禁止　前には群婚と雜婚との事を記したが、……何れにせよ、最初極めて自由亂雜であつた男女關係が、種々の點に於て制限せられて來たに相違はない。例へば、近親結婚が嚴重に禁止せられた。……或種族の如きは、今日よりも一層嚴重に之を禁じて居た。即ち從兄弟同志の結婚を禁じたのもあれば、母系血族一の結婚を禁じたのもある。そこで男子は自己の部落を出でゝ他の女子を求めに行つた。然るに女子が少くて容易に得られぬ。殊に美しき女子は甚だ少い。茲に於て男子の心中に女子私有の慾望が起つて來た。

◎夫婦の起原　斯くて漸く或一男子と或一女子との間に特殊の關係が結ばれる事になつた。或男子が他の男子の承諾を經て（若しくば經ずして）或女子を其の私有とすれば、他の男子も亦た漸々に之に倣うて來る。……夫婦なるものは斯くの如くして起つたのである。

◎賣買結婚　は斯くの如くして欲情の目的物と爲り、子孫の製作器と爲り、最も便利重寶なる奴僕となり、漸くにして賣買の貨物となつた。若き娘を持つ父兄は之を他の若き男に賣つた。……賣買結婚といふのは此事である。……而して其の賣買の代價の處分が、後に儀式となつて殘つたものが、即ち今の結納であらうと思ふ。

◎掠奪結婚　然るに、何分にも腕力まかせの時代の事とて、賣買なんどは面倒くさい、腕づくで引さらつて來るが一番の早道、それに限るといふ場合もあつた。……掠奪結婚といふのは即ち此事である。……日本などにも、婚禮の晩に石を投げる風俗のあつたのは、矢張り此の掠奪者を追ひかけた名殘であらう。今日に於て大變に神聖なものゝ樣に思ふ、夫婦及び結婚とは、其の起原に於て實に斯くの如き意義のものである。

◎女子を品物として扱つた話　埃及の或王樣は其の娘の賣淫で得た金を以て金字塔を建てたとか、又或王樣は其娘をやるといふ賞を懸けて、話の名人を募つたとか、獨逸人の祖先の間には、客人への御馳走として妻や娘を貸したとか、總て男子が女子を物品として扱つた話が數々ある

◎奴隷制度　奴隷の起原を尋ぬるに、昔の野蠻人が戰爭に勝つて、多數の敵人を捕虜にした時、……徒らに之を殺すは無益であるから、活かして置いて何かの用に使はうと云ふ事になつたのである。——されば奴隷は牛馬同樣に追ひ使はれて、殆んど人間としての扱ひは受けなんだのである。此の制度が段々に發達して、希臘の如きは、自由民と奴隷との二大階級を生じた。

◎女子は男子の奴隷　然るに、人間社會に於る此の奴隷の地位は、恰かも男子に對する。婦人の地位に似て居る。……されば人間社會には縱と横とに二大階級があると思へば善い。即ち横に見れば、上流社會と貧民との二大階級があり、縱に見れば男と女との二大階級がある。

●幸德秋水氏の米國着

同氏は十二月五日無事桑港着、當分同市ヘイス町六八〇平民社支部に滯在すといふ

讀者より

▲「趣味なき手紙」　他鄕の空に多くの日を暮らす吾等旅商人は、家居の人の曾て見ざる諸國の勝景や人情風俗の各異る人々に接して隨分面白き事もある代り、家庭上の趣味を得ることの出來ぬは補ひ難き欠點である。切めては手紙の上にてドゥにか出來ぬものであらうか。生は毎月一二回の家信に接するが、其度に「米が無い、金を送れ、早く歸れ」の常文句では飽きて了ふ。旅人の或者は此の如き無趣味なる手紙を受取つた時の憂さ晴しに先づ一本の銚子となる。是れ軈て大なる濫費の基。どうかモ少し趣味を感ぜしむる手紙は書けぬであらうか。東天紅を點じて閨窓に映る爲の影、幼の女兒がお父さんの歸るを待ちて小さき指を折りて居ることや、いつぞお父樣に聞いた昔噺を母に語り居る情趣を報ずることしたらば、物質ばかりの手紙の不快を與へるに比して大によからうと思ふ（北海道砂川にて、正満生）

▲家庭雜誌の眞使命　家庭雜誌御擴張なさるさうで喜ばしい事です。充分御健筆を揮はれて

利己的肉慾的なる現家庭生活に大光明を投じ、愛他的靈的なる新家庭に導かれんことを冀望します。今の家庭は人道の敵なり自由の賊なり人情の壓制者なり。愛情を靈化せずして肉化するなり。滔々たる今の家庭が類、劣等なる慾望、小さき感情、狹隘なる道德を墨化して劣等なる利己主義に媚を呈し、婦人の自由を否認して男子の自由のみを絶叫し、婦人が男子の奴隷たることを道德と爲す。斯かる保守思想を打破するや至難なりと雖も我が家庭雜誌の正に遂ぐべき眞使命に非ずや。何卒御健鬪を祈ります（周防、小田野啓）

▲發展につきての希望　小生は多大の興味を以て貴誌今後の發展を翹望いたし居候。甚だ失禮かとも存じ候へども貴誌に對する希望左に概略申上候。採否は固より御意のまゝに成さるべく候。（一）料理法を毎號御掲載相成度事。但し成るべく平民的のものにして且つ日常多く入用なるものたるべし。（二）交詢欄を設け讀者の交詢を謀られたき事。或は質問に對し記者諸君に於て御答へ相成候樣御計畫ありたき事。（福島縣、渡邊豐喜）

△記者申す、御忠告多謝致します。（一）（二）とも吾々の力の及ぶ限り貴意に副ふやう努めたいと思ひます。殊に（一）については讀者諸君が實際經驗の結果を御投稿下さらば甚だ趣味多きことならんと信じます。尙御氣付の點あらばどなたでも遠慮なく御申聞を乞ふ。

▲「追憶」「妹の許に」　など題して下野那須の人見琴子氏より新體詩數首を寄せられました、一々掲載は致しませぬが、「仰げば高き那須の峰の白雪きら〱と」したる今、「思へば彌生の末つ方、妹の君と諸共に、雲雀の歌を耳にして、「遊びし昔を偲び「嗚呼なつかしの春の日や、今は過ぎにし夢にして」と感慨を述べられたる處、おもしろく承りました。

▲「勞働の歌」　「紫綬金章の榮もなく、羅布瑤臺の富なくも、働く腕に人の世を、救ふ響を聞かざるや」（稻塲生氏寄稿の一節）。足らざるを足れりとし、努めて現在の境遇に謳歌する勞働者の心根、そして如何にも悲哀の韻のこもつて居る此歌は思はず人をして落涙せしめます。

新刊紹介

▲獨立評論（山路愛山主筆）　雜誌とは云へど毎號長篇の一文章を以て殆んど其の全紙を埋めて居る。丁度家庭雜誌が第一卷の第六號に於て「百年後の新社會」を以て全紙を埋めたのと同じ流義である。「小政府論」あり、「帝大論」あり、「明治三十七年戰史論」あり、「耶蘇傳管見」あり、最近の第九號 卅八年十二月分）には「國家社會主義梗概」あり。世間の雜誌中、最も特色あり、最も獨立の面目ある者、當今の讀書家は必ず之を見逃すべきに非ず。左に老熟自在なる愛山君の文章の一班を示す。「十一月廿六日、杖を村内に引く、犬ありしきりに余を吠ゆ、石を投じて戰を挑む。犬去る。則ち小徑を歩して進む。路傍に黒羅紗の帽子を戴り、筒袖を着け、股引しりからげしたる肥大漢あり。余を窺ふものゝ如し。忽ち、やあ山路君に非ずやと云ふ。余ら君は誰だと問返す。那の漢笑つて帽を脫するを見れば何ぞ計らん德富蘆花君ならんとは」（毎月一回、一册八錢、府下澁谷村九〇二其發行所）

▲ヘナブリ俱樂部（第二號）　第一號の時にも云つたが、此の雜誌は漫畫に著しき特色を示して居る。本號に添へたる附錄には、女學生風の細君と洋服男との連立つて歩く所を書いて其の洋服男の背中に赤ン坊をおぶはせて、左の手に大根をさげさせて、右の手に自分のと細君のと蝙蝠傘を二本持たせて、そしてスヰート、ホームと題した所がチョイト人を微笑せしむるに足る（一册十錢、東京淀橋小學前へなぶり俱樂部）

▲泰西風景名畫集（三宅克己選）　坂井義三郎氏がスケッチ會より發行するものにて「此の原畫は、三宅克己君が先年佛國巴里滯在中、古版畫古雜誌などを賣つて居る或老婆の店へ、間がな隙がな出かけて、根氣よく漁り盡して、會心の畫五十餘枚を蒐られたので、或時は半日にして僅に一枚を探り得、或時は數時間にして二三枚を掘出したこともあつたそうで、眞に苦辛慘憺で蒐集したものである」第三輯一月下旬發行、毎輯六枚一帙入、一輯三十錢、送費五錢、三輯分送費共一圓（本鄕眞砂町スケッチ會）

▲小說「悲慘」（川越てる子譯）　全篇を通讀して其イジらしさ、哀れさが何となく頭の中に湧いて來るが、印象が朧氣でドウも泣きたいほどの同情が起らぬ。餘り直譯に過ぎた爲めかも知れぬ。價廿五錢、神田表神保町大屋書房發行）

▲海堡技師（岩野泡鳴著）　著者「口語を以て一種の詩劇を作らんと欲すると久し此書は卽ち其の手始なり」といふ。讀んで行くと何だか暗がりを手さぐりで歩くやうな氣がする・實に幽玄極まるものだ。蓋し「冥想詩劇」の銘の通り（價四十錢、京橋區五郎兵衛町金尾文淵堂發行）

▲光（一ノ二）　戒嚴令の下に久しく發行停止を命ぜられ居りし週刊新聞「直言」は今回解停せられたるを以て本誌に合併し、本誌は今後日本社會主義者の中央機關として活動すべしといふ。本號には「凡人主義とは何ぞや」「幸德秋水君を送る」「高價なる犧牲」「時事評論」等あり。體裁は略ぼ前の「直言」に同じ（價一部三錢五厘、毎月二回、本鄕駒込動阪町五四凡人社發賣）

▲谷中村買收事件（非賣品）　鑛毒事件の爲め十年一日の如く寢食を廢し、曾て倦むとなき日本の偉人田中正造翁の口授を加藤安世氏の編輯したるもの、衣食窮乏し、人民皆愚なる彼村落中に身を投げ出してドコまでも正義の叫びを止めぬ翁等の忍耐は實に日本人の名譽である（栃木縣谷中村編輯事務所）

▲ホト、ギス（第九卷第三號）　謂はゆる子規派の文學機關、俳句と寫生文と漫畫と、皆編得の妙あり。一たび之を嚼みしめたる者は、永く其の津々の趣味を忘れ得ぬであらう。虛子雜詠の中に「秋來ぬと六尺立てる案苑かな」「百舌鳥啼くや城出る使者を見下して」「秋風やいつま

で過はぬ野路二つ」（毎月一回、一册十五錢、五册前金七十五錢、麴町區富士見町四丁目、佛書室）

▲人生の行路（第三、生活の趣味）　西洋其まゝに過ぎて、日本にはハマラぬ節も隨分あるが、大體に於て、日常生活の上に善き教訓と忠言とを與へて吳れる親切な本である。殊に青年女子は此書に依りて一道の光明を前途に認め得るであらう。（定價三十錢、本鄕駒込西片町內外出版協會發行）

▲曳馬の友（第三十號）　可憐なる此小雜誌は三日見ぬ間に大分大きくなり、愛を標榜して健氣に立ち上つた。加藤時次郎氏の「單一なる生活法」と題せる菜食主義の話は本號から掲出され初めたし、其外に紀州の祿亭君の文も見えて居る。靜岡縣下で而も我が同志の發行と聞くと、小さな事をいふ樣だが、ボクには少々懷かしい樣な心地もする（韶）（毎月一回、一册郵稅共三錢五厘、靜岡縣濱松町田町實業徒弟共勵會發行）

▲うらにしき（第百五十七號）　基督敎的家庭雜誌の一種で、且つ文學方面の記事が中々に多い。卷頭の「現今の兩性問題」の如き一讀に値す。（毎月一回、一册七錢、神田駿河臺北甲賀町十三尙絅社發行）

▲火鞭（第四號）　青年文士の氣焔ますく\〱當るべからず。本號には戀愛問題に關する二十餘家の解答を掲げたり。一方に禁慾主義、排內主義が其の壘壁を高くすれば、他方に自由主義、天然主義が其の眞面目を現はして、さてもとりく\〱に面白きことよ。（毎月一回、一册十錢、本鄕區眞砂町十七平民書房發行）

▲二聖の福音（全）　英和對譯を以て釋迦と基督との傳記及び聖訓を記したるもの（袖珍百八十頁、定價三十錢、本鄕東片町一一一新公論社發行）

* * * * * * * * *

▲家庭の友（三の九）　駒込　內外出版協會

▲家庭週報（四一）　女子大學校內櫻楓會

▲婦女新聞（二九二）　牛込東五軒町　其　社

▲家庭の栞（一一）　新潟縣女子師範內教育會

▲正則中學講義錄（二の五）　大日本國民中學會

▲工業の花（八の三五）　大阪東區職工教育會

▲帝國新報（二）　府下元角筈　其　社

▲英學生（三の三）　神田表神保町　東　西　社

▲無我の愛（一三）　府下巢鴨　無　我　苑

▲ハヽキ木（一〇）　長野縣松本町　其發行所

▲新公論（二〇の一二）　本鄕東片町　其　社

▲新佛教（六の一二）　駒込　新佛教徒同志會

▲埼玉衞生新誌（一七）埼玉縣浦和町　其　社

▲大阪婦女新聞（八）　大阪西區　其　社

▲東京市報（三二）　神田錦町　其　社

▲大阪タイムス（一四七）　大阪北區　其　社

▲博物學雜誌（六の六四）　神田五軒町其　社

▲新國民（二の二）　駿河臺大日本國民中學會

▲新紀元（二）　府下角筈　其　社

▲月刊スケッチ（二の九）　本鄕スケッチ會

▲弘道（一六五）　飯田町　日本弘道會

▲好學雜誌（三〇）　府下原宿　其　發　行　所

▲樂しき家庭（一）　牛込　美　學　會

▲牟婁新報（每號）　紀伊田邊町　其　社

▲平等（一）　函館區高砂町十二　其　社

●凱旋の日、巷に立ちて

我れ願はくは稚兒の、
母の乳房にすがること、
理想の星を打ながめ、
無窮平和の天國に、
世をことく\〱く導かん。

其一節—白玉樓主人

Gaisen Mon.

Inaka kara Tôkyô e kita hitori no hyaksyô, Mansei-Basyi no gaisemmon o mite:

"Kôryâ hâ dekkyâ mon deyas nâ! Ittyâ zentyâ nani ni sur mon da bê?"

Waki no hito: "Are wa Ôyama Taisyô no gaisemmon des."

Inakamono: "Ôyama San no oyasyiki a Akasaka da cû ni konna toko kara mon o kosyiraecâ de-hairi ni hone ga orebê ne!"

Bok no Tsuzurikata.

Nen no tame Bok no Rômaji no tsuzurikata no mihon o hitots ftats naraber:

Wata*ksyi*, Kisya Ha*ccak* Jikan Hyô, Syuppa*ts* su*r*, Ameri*k*a, *I*gilis.

(Koko made 6ts wa Fkao Syô ga kaita.)

Tsuzurikata no Seisonkyōsō.

Rōmaji o motte Nihongo o utsusu niwa, Hito ni yotte iro-iro no Yarikata ga aru. Tatoeba, アル o "aru" tomo kaki, "ar" tomo kaku. Mata ウツス o "utsusu" tomo kaki, "utsus" tomo kaku. Fukao Kun no "syi" to kakutokoro o Boku wa "shi" to kaki, Boku no "Rō" to Kakutokoro o Fukao Kun wa "Rô" to kaku. Mata Boku wa チ o "chi" to kakitai to omou noni, Fukao Kun wa "ci" to kakō to iu. Sono hoka iro-iro no Ten ni oite, Boku to Fukao Kun to wa Moji no Yōhō o koto ni shite iru. Shikashi Boku wa aete Boku no Yōhō o Koshitsu shiyō to wa omowanu. Jitsu no tokoro, Jibun nagara mada Yōhō o ittei shite oranu. Yue ni sono toki shidai de donoyōni henka suru ka shirenu. Sokode Mina ga konoyō ni shite iruto, sokoni Tsuzurikata no Seisonkyōsō ga okoru. Seisonkyōsō no Kekka, Shizentōta ga sono Aida ni okonawareruto, Jissai no Shiyō ni tekishita Tsuzurikata nomi ga nokoru koto ni naru de arō. Nanishiro, Ima wa Shikenchū no koto de arukara, meimei iro-iro ni yatte miyō de wa arimasenuka? Fukao Kun ga amari kyūshinteki na yarikata dakara, Boku wa kyō no tokoro dake, wazato sukoshi hoshuteki ni yatte mita, Shokun no Okangae wa ikan?

(Sakai Toshihiko.)

RÔMAJI RAN.

Rômaji Ran o Oita Wae.

Kanji to Kana to ga starete Rômaji ga Nippon-moji to nar no wa syizen no ikioi des. Sosyite sono toki wa mô mamonak kur ni cigai nai. Wareware wa hayak sono yôi o syite okanakereba narimasen. Katei Zassyi ni Rômaji Ran o kosyiraeta nomo mattak sono tame des.

Omedetô!

Syinnen, omedetô! — towa iu mono no, syokun, naze Syinnen wa omedetai no des ka?

Syôgats! sore wa Wataksyidomo ga subeteno yoi koto o sur tameni 365 nici o uketor toki dewa arimasen ka? Sanganici! sore wa mamonak kono yo ni kitar beki utsuksyii yo no hinagata ga Wataksyidomo ni syimesarer toki dewa arimasen ka? Kore ga omedetak nakte dô syimasyô!

Yoi Koto no Syihajime.

Hito no kokoro wa saka ni kuruma de, susumanakereba syirizok syi, tomareba jikini ksatte syimau. De, Syinnen niwa nanika atarasyii yoi koto o syihajimeneba narau. Wataksyi wa syokun ga yo no nariyuk raki o kangaete kotosyi, kono Syinnen, kara Rômaji o tskai hajimete tadakitai to omou.

"Fumi no Mici."

Rômaji-bun niwa Kango o tskatte wa ikenai to osyierareta hitori no jogaksei ga kunimoto no cici-oya e yatta tegami ni:

"Konogoro wa Fumi o yomdari Fumi o kaitari sur noni isogasyikatta node tsuitsui hisasyik *Kari* no tskai no ato taete *Kaesyikoto* sae itasyimasen desyita."

Oyaji kore o mir to atama kara yuge o tatete Tôkyô ni tonde iki, musume no yado e tsuk to ikinari sono yokottsra o haritaosyita.

"Kono rokdenasyi-amah! Otoko to Fumi no yaritori o syitari, syakkin o kosyiraete sono *kaesyikoto* mo syinê tâ ftê ama da!"

Ikra Rômaji-bun niwa Kango ga ikenai to ittemo dôka tsûyôsur yôna kotoba o tskatte moraitai mono de ar. Rômaji Hirome kai no syokun, cito kangaete mite kudasai.

●由分社より

△新年おめでたう！平和の新年おめでたう！進歩の新年おめでたう！

△此のめでたき新年に、家庭雜誌も又一つ歳を加へました。處で謂はゆる擴張、刷新、發展が、背丈の延びたばかりでと云はれぬやう、社中一同大いに勉強する心得でありますが、讀者諸君に於かれても、此の小兒の成長の爲に御助力下さるやう、切に御願ひ申上げます。

△本社は只今の處、堀保子、堺爲子、深尾韶、堺利彦の四人にて經營して居ります。而して西村渚山君は必ず常に編輯を助けらるゝ筈であります。

△西村君の外、紀伊の大石祿亭君、靜岡の久田二葉君、岡山の中尾傘瀬君、東京の安藤火州君等も亦、是迄どほり多大の援助を與へらるゝ約束であります。

△本誌從來の代價の勘定にて、今月又は來月にて前金切となる諸君には、新代價と勘定を致したる上、近日別に葉書にて申上げます。何卒宜しく願ひます。

△昨年中にて前金切となりたる諸君にて、未だ次の前金御拂込み下さらぬ方々は、新年匆々御面倒ながら、此際成るべく早く御拂込を願ひます。

本誌代價	
一部	金十錢
六ヶ月前金	五十五錢
一ヶ年前金	壹圓
（何れも郵稅共）	

廣告料	
特別一頁	十圓
普通一頁	七圓

●規定

▲本誌は每月一回（一日）發行とす。
▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵劵代用ならば五厘切手で一割增に願ひます。
▲御手紙には必ず住所姓名をハッキリとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。
▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切れた時には帶封に「前金切」と朱印を捺して上げますから御注意下さい。
▲歐米諸國よりの御注文は別に一冊に付二錢づゝの郵稅を申受けます。

明治三十八年十二月卅一日印刷
明治三十九年一月一日發行

東京市麹町區元園町一丁目廿七番地
發行兼編輯人 堺利彥

東京市京橋區日吉町十番地
印刷人 中村彌助

東京市麹町區元園町一丁目廿七番地
發行所 由分社

大賣捌 東京堂 上田屋 東海堂 良明堂

由分社書籍目錄

（金額十錢以下の御注文には別に郵税二錢を申受く）

- 社會問題解釋法（安部磯雄氏著） 價一圓廿錢
- 社會主義入門（平民社同人編） 價十錢
- 消費組合の話（石川旭山氏著） 價十二錢
- 地上の理想國 瑞西（安部磯雄氏著） 價十五錢
- 社會民主黨建設者 ラサール（幸德秋水氏著） 價十五錢
- 土地國有論（西川光二郎氏著） 價十錢
- 富の壓制（西川光二郎氏著） 價十錢
- 經濟進化論（田添鐵二氏著） 價十五錢
- 革命婦人（平民社同人編） 價十二錢
- 百年の後の新社會（堺利彥譯） 價五錢
- 理想鄉（堺利彥譯） 價五錢
- 英國勞働界の偉人 バアンス（西川光二郎氏著） 價五錢
- マルクス（少年傳記）（西川光二郎氏著） 價五錢
- 社會主義神髓（幸德秋水氏著） 減價二十錢
- 廿世紀の怪物 帝國主義（幸德秋水氏著） 價廿五錢
- 小說 火の柱（木下尚江氏著） 價卅五錢
- 小說 良人の自白 上中下全三冊（木下尚江氏著） 價各卅五錢
- 小說 勞働問題（堺利彥譯） 價卅五錢
- 家庭の新風味（堺利彥著） 價壹圓
- 家庭夜話（堺利彥編） 價壹圓
- 枯川隨筆（堺利彥著） 價二十錢
- 言文一致 普通文（堺利彥著） 價卅五錢
- 我家の犬猫（堺利彥著） 價八錢
- 小品文集 半生の墓（堺利彥著） 價卅五錢
- 少年讀本 日のある人（堺利彥著） 價十錢
- 小品集 智識と趣味（新渡戶氏編） 價卅五錢
- 青年と生存競爭（安藤重毛氏著） 價二十錢
- 社會主義名士肖像 畫葉書（一組六枚） 價十錢
- 家庭雜誌合本（第二卷） 價五十錢
- 家庭雜誌合本（第三卷） 價八十錢
- 少年少女 新遊戲集（西村渚山著） 價廿五錢

發行所 東京市麴町區元園町一丁目 **由分社**

福田英子女史著

新刊

妾の思ひ出

新刊

▲著者曩に『妾の半生涯』を公にして自ら其の半生の經歴を談るや世は爲に殆んど震盪せりき▲各地の兄弟姉妹にして、彼女の爲に或は親しく訪問し、或は遙かに書を寄せて、慰藉を與へられたるもの既に數百人に及べり▲彼女固より筆の人に非ず、想の人に非ず、然れども彼女に唯だ、一特所あり、一片の情熱あり、▲然り唯だ此情熱や、以て鐵をも鎔かすに足る、蓋是彼が如き平凡の文字も能く一世を動したる所以なり、▲今や彼女が渾身の情熱抑ふること能はず、遂に烈々たる猛火となりて『妾の思ひ出』を出しぬ▲此書事を小説に托すと雖ども、實は彼女が内生活の歴史とも見るべきもの▲『妾の半生涯』の記する所、餘りに概略なるに比して、本書は寧ろ具體的に詳述せるものなり▲菊判約三百頁、製本優美▲定價卅五錢郵稅六錢

大賣捌

神田裏神保町 上田屋

神田猿樂町 中庸堂

福田英子女史著

妾の半生涯

◉第四版◉

▲大阪事件の女傑景山英子、今や福田未亡人として自ら其半生涯を語る▲彼は如何にして爆裂彈を懷くに至りし乎▲彼は其間に於て何人に情を寄せたりし乎▲彼は何人に於て其戀を失ひ、何人に於て更に其愛を得たりし乎▲彼の獄中生活は如何に奇なりし乎▲彼は如何に其後の廿年を過したる乎▲彼は如何にして四人の子の母となりたる乎▲彼は如何にして最後の失望の間より更に新光明を認め得たる乎▲彼は卒直に、大胆に、淡白に悉く自ら之を語れり▲背像入、定價三十五錢郵稅六錢

發賣所

神田裏神保町 上田屋

神田猿樂町 中庸堂


諸學校御用
TRADE S.A MARK
ANDO-SHOTEN
No. 5 Urajimbo-cho KANDA. TOKYO
Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.
東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四八四番
改良ロンテニス二重枠ラケット一組
一號品 一二、五〇〇
二號品 一一、〇〇〇
三號品 八、八〇〇
四號品 七、四〇〇
五號品 六、七〇〇
六號品 五、七〇〇
七號小學用 四、七〇〇
八號婦人用 六、〇〇〇
九號婦人用 七、〇〇〇
体育用品
東京神田裏神保町五
S.A. 安藤商店
ピンポン室内テニス
一流 一箱 一、三二〇
二號 同 一、五〇〇
三號 同 一、六八〇
四號 同 一、八三〇
號外 同 〇、八八〇
改良テニスネット
一號 一張 四間半 一、七五〇
二號 一張 五間半 二、二五〇
三號 一張 六間 二、四五〇
四號 一張 七間 二、九五〇
ゴム入フートボール
二號 一個 四、〇〇〇
三號 同 四、五〇〇
四號 同 五、〇〇〇
五號 同 五、五〇〇
六號 同 六、〇〇〇
七號 同 六、五〇〇
八號 同 七、〇〇〇
體操遊戲器械一切
東京神田裏神保町五
安藤商店
電話本局四百八十四

磯部
日本橋濱町三の一
中の橋通り東入
外科皮膚病
梅毒痔痳
診察午前
檢三

産科
婦人科
朝長鷹二郎
横濱市眞砂町二丁目廿六番地
診察毎日午前

此清心丹は全國到る所にあり



旅行又は平常携帯に便利也

用に適す

社會主義中央機關 **光**

毎月二回五日廿日發行 ●一部三錢 ●十部二十五錢

第三號(十二月廿日發行)要目左の如し

▲國家社會主義梗概を讀む　堺利彥
▲僕等の社會主義　大石祿亭
▲地獄とは牧師の行くところ(小説)　白柳秀湖
▲賤女郎の生活狀態　山口孤劍
▲失業者問題　西川光二郎

其他時事論評●世界の新聞●同志の運動等材料頗ぶる豐富

第四號(新年號)一月五日發行

◉申込所　東京本郷駒込動坂町五四　凡人社

小説 **良人の自白**

木下尙江著

上篇第八版
中篇第七版
下篇第六版

各冊卅五錢●三冊揃壹圓●郵稅共

東京麴町區元園町一丁目　山分社

小説 **良人の自白**

本誌編輯員
加藤咄堂
田中我觀
高島米峯
古川流泉
境野黄洋
杉村縱横

新佛教

定價部税共
一部拾一錢
◉半年分六拾五錢
◉壹年分金壹圓貳十五錢也

第七卷第壹號一月一日發行要目

毎日授業 創設 女子割烹家養成科（習學者募集）

女子割烹家として學校教場に教鞭を執らんとする者、家庭教師として割烹の研究をなさんとする者及一般女子として割烹に熱心なる者の爲に新設する所なり。故に授業を毎日とし教授法を新案し、費用を節約し割烹に附屬すべき各科を實用的に教授す。（本科は少しも料理の心得なきものにても入學する事を得）

規則

（學期）三ヶ月▲第一回卅八年九月始業（但中途入學するも差支なし）學期は入學の日より滿三ヶ月とす十二月三日第二回開始（一月にも入學差支なし）

（學科）日本料理、西洋料理、女子作法、造花、茶道、包方、活花、▲作法、以下の各科は割烹必用の物、故に學科中に加へ授業する事とす但淨學者の都合上、午後の各科に欠席するも差支なし

時間表

	午前	午後
日	八時より十時まで 惣菜料理 特種料理	一時より四時まで 料理應用 造花
月	九時より十二時まで 料理心得 客膳料理	二時より五時まで 料理應用 茶道
火	九時より十一時まで 惣菜料理 野菜料理	一時より四時まで 女子作法 女子花結
水	九時より十一時まで 諸菜切方 料理心得	一時より四時まで 各科復習
木	九時より十二時まで 客膳料理 西洋料理	二時より五時まで 料理應用 諸種包方
金	休日	
土	九時より十一時まで 各科復習	二時より五時まで 料理應用 挿花

（學費）束脩金壹圓　月謝金參圓
原料費（料理實習費用）同（茶道活花包方造花）自辨

◎但本學期間の入學生に限り原料費半額を要せず習學する事を得
◎地方より來り習學する者の爲に寄宿を許す費用一ヶ月金七圓程度とす
◎學費束脩金は入學の節、其他の費用は毎月五日迄に納むるものとす
（卒業證書）三ヶ月間修學者に授與す
○本養成科に付て聞合を要する事あらば教場に御出の上御聞ありたし

東京市京橋區鈴木町十一番地
大日本割烹學會



腦病 靜靖丸 頭痛

腦力を明快にし腦病神經病を全治す

腦病 にて常に頭重く、記憶弱力く、忍耐力薄く、氣鬱ぎ、不眠、頭痛を煩ふ人

神經 症にて僅の事を苦慮し、常に動悸、息ぎれを感じ怒り易く、悲み易く、心弱き人

逆上 症にて常に顔紅く、頭痛、眩暈し、耳鳴目かすみ、肩凝り背重く、便通少なき人

頭痛 症にて學生の常に煩ふ勉學性頭痛、感冒、徹夜、苦慮等より發する者其他總ての頭痛及ひ頭痛持の人

不眠 神經家又は老人等の夜分安眠を得ざる人、亦は苦慮、悲痛、等にて眠むられざる人

其他常に腦を勞する人及神經家亦は大酒家、肥滿家は持藥として此藥を服用せらるべし腦力を強健にし精神を快活ならしめ、中風、卒中風を豫防する希有の偉効あり、

藥價 〔二日分弱金拾錢 廿二日分(常備用)金壹圓 十日分金五拾錢
〔六日分金三拾錢 四日分金貳拾錢

本舖 東京市日本橋區藥研堀町 藥劑師 高木與八郎

逆上を引下げ睡眠を催し頭痛を即治す